

電燈に透して眺めたり指先で嘗めたりして見た、霎時沈黙は續いたと。突然力は叫んだ。

「これは〇〇〇〇だ」

「男に玩具にされた女の飲む薬ですつてね」

「墮胎！」と力は唸つた。

「本望でせう？」

「何處から買ひました」

「買ひやしないわ、私だつてお医者さんに友達があつてよ」

環の顔は蒼白め、眼の光は飽くまでも冷やかである。

「飲むんですか……墮胎！」

「飲まなきやならな ぢやないの？ 私だつて結婚前ですもの」

「誰が此那事を教へました」

「誰がつて貴方が」

「僕は教へやしない、解つた貴方の母親だ」

「仰しやる通りよ、上條男爵から申込みが來たんですもの」

「立派な母親だ」

「其れより立派なのは貴方だわね」

「宜しい」と力は膝を正して腕を拱んだ、「血で血を洗ふんだ、罪を救ふに罪を以てするんだ、環さん、お互ひに年が若いです、些とは生甲斐のある生活をして見たい。墮胎は特別の場合を除く外は殺人と同罪です、之を犯さなければ二人は生きて行かれない、君も僕も悪因縁だ、腹の中に五月で殺される子は更に悪因縁だ併し母に呪はれ父に呪はれ祖母に呪はれし子は幸ひに生れ落ちても決して幸福ではありませんすまい。

此まで言て力は兩手を後頭へ廻したまゝ、ころりと疊に倒れた。彼は一旦の誘惑

に打勝つ事の出来なかつたほんの出来心が斯くまで罪へくと自分を落し行く顔面の天罰に驚いたのであつた。此の場合自分の取るべき道は何であらう、其れは解つて居る、環と結婚する事だ、けれども其れは餘りに残酷である、元とく環と結婚しやうなどは、夢にも思はないのだ、彼の靈の全部は篤子にあつた、けれども彼の肉の全部は環に囚はれた。

「僕が悪い／＼實に僕が悪かつた」

彼は疑と天井を見詰めながら謔言の様に言た。お時にも罪があらう、環にも罪があらう、併し自分は男だ、男子として誘惑を拒絶する事が出来なかつたのは自分が悪いのだ。卒然として彼は起直つた。「どうしても／＼」と彼は言た。「篤子の事は断念められない」彼は環の前に頭を低れた。

「許して下さい、環さん、僕が悪かつた、どうか許して下さい、其薬を飲で下さい」「えい／＼飲みますとも、今此處で飲で御目にかけるわ、貴方の子を殺すんだか

ら貴方の眼の前で飲みませう、而して二人は是れつきりでお別れとさせよう、結構なお別れですわね、水盃の代りに劇薬！ハイカラだわね、而して御安心なさい、幸福におなりなさい、篤子さんと結婚なさい、私も上條男爵と結婚するわ、水を頂戴水を」

「其處にある」と言たきり方は眼を閉つて下を向いた。

「微温湯の方が可いわ……だけれども變な薬もあるものね、二人を幸福にする薬、さあ飲みつ振を見てお置きなさい、あゝ何だか厭に紅いちやないの、幸福の色、紅いものかしら」

紙包を取上げて片手に湯呑、顔を仰向に反らしかけた一刹那。

「待て頂戴！」といふ聲諸共兩戸と障子と一度に開いた様な音がして、突如環の手に取紐つたのは篤子であつた。紅い粉が零れて握られた環の拳と握つた篤子の白い腕に降り注いだ。

「何をされるんです」と環は咄嗟に叫んだ。

「これは、この薬は何です」と篤子は窘める様に言た。二人の手は粘着いたまゝ離れない、而して互に眼と眼を凝と見合はした、激しい胸の鼓動、肩が忙しく揺れると共に窺み来る鼻息ばかりが死せるが如く静まり返つた室内に際立つて聞えた。力は膝に両手を置いたきり凍て付いた如く身動きもしない。

「放して下さい」と霎時あつて環は言つた。

「いゝえ放しませんわ、貴方方が此那事をなさるなら私死んでも放しませんわ」

「貴方は私を侮辱するの？」

「私何んで貴方を侮辱しませう」

「僕が悪い」と力は吐息と共に言つた。

「あゝ既う何も彼も駄目だ」

「何が駄目なの？」

「凡てが駄目です」

慚愧と絶望、蒼白めた額に油の様な汗が滲んで見える。

「事は簡単だ、僕が死ぬか環さんが死ぬか、二人一緒に死ぬか、でなければ胎児を死なすか、何れにしても解決は死にあるんだ」

「何を仰やるの？」と篤子は叱り付ける様に言た。「誰が死ぬといふんです、誰が誰を殺すといふんです」

「生きて居る事が出来なければ死ぬより他に道が無いぢやありませんか」

「私は死ぬのは厭だわ」と環が言た。

「什麼して生きて居られないの？」

「僕は幸福の爲めに生きて居るんだ、幸福がなければ生きて居る必要がない」

「どうして幸福が無いの？」

篤子は益々追窮した。

「僕はく〜」と力は行詰つて僅に環を指さした。「腹に子がある、環さんと結婚しなきゃならない」

「結婚をなさい」と篤子は咄嗟に叫んだ。

「馬鹿な事を」と力は直ぐに言た。

「僕に其れが出来る位なら此那罪惡を企みはしない」

「結婚をなさい」と篤子が再び夢中に言た。

「環さんも僕と結婚の意志が無いのです、愛する事の出来ない二人が……」

「いゝえ結婚をなさい」

「其れぢや君は什麼するんです」

「私？」

「君と僕の結婚は？」

「私と貴方？」と篤子は何物かを探る様に眼を鴨居の方に向けた。

「僕の結婚する女は君より他に一人も無い、僕は君を愛して居る、僕は君を愛して居る、僕の妻は……」

「あゝもう止して頂戴」と篤子は耳を塞いで凝と我が膝元に眼を移して考に沈んだ。彼女は今ま初めて我といふものに復つた。我が愛する男は眼前に居る、其男は今ま他の女と不品行を働いた、報いは立どころに二人に落ちた、胎内の子を殺さうとして居る、何故其那事を仕出来たらう、自分に愛が無いためだらうか、いや爾ぢやない、力さんは確に私を愛して居る、愛して居ながら、環さんに身體を許す……

眼を上げて力の顔を見ると力の顔色は全く土の如く褪めて、重い瞼、弛んだ唇鼻から出る呼吸も苦しさう、環は机に凭れて顔を埋めたまゝ身動もしない。

「君は僕を怒つてゐるでせうね」と力は言た。

「いゝえ」

「浅間しい畜生だと見下げたでせうね」

「いゝえ」

「君は僕を什麼思ひますか」

「お氣の毒だと思ひますわ」

「氣の毒？ 僕の様なものでも……君は仔且僕を愛してくれますか」

「えい、ですけれども」

篤子は初めて兩袖を顔に當て、泣いた。

「愛してくれる？ 僕が此那事を仕出來しても？」と力は摺り寄て篤子の手を取らうとした。

「不可せん」と篤子は膝行退つた。顔は涙に濡れて居る。「私の身體に觸つちや不

可せん、貴方は環さんの良人です」

「なに？ 良人だ？」

「良人になつて下さい、爾しなければ貴方は恐ろしい罪人になります」

「では君は僕を愛してると言たのは嘘なんですわ」

「愛して居ますわ」

「愛してゐるなら何故僕と結婚してくれないんですか」

「力さん」と篤子は疑と力の眼を見話めた。「私貴方を愛してゐるから環さんとの御結婚を御勧めするんぢやないの？」

力はぶる／＼と肩を慄はした。「あ、篤子さん」

「もう何にも仰しやらないで頂戴」

「電燈が淋しく沈黙せる室内を照らして居る」

「環さん」と篤子は言た、返事が無い。机に凭れたまゝ環は眠つて居た。

「暗だ」と力は堪へ兼ねて言た。「僕は自分の弱い事を知てる、だから僕は何れだ  
 け此の誘惑に打勝たうと努めたらう、けれども其れは駄目でした、須磨の宿屋は  
 僕の肉を腐らす毒を食はした、宿屋ぢやない伯母さんだ、食つた僕には前後の考  
 へもなかつた、其れが今僕の生涯を暗に葬るんだ、餘り酷い、残酷だ、其の  
 ために君は、君は……篤子さん、君までが生涯を犠牲にしやうとして居る、僕を  
 罪から救はうとしてくれる志は難有い、實に嬉しい、感謝の言葉が無ければ  
 も自分の愛する女から絶縁の宣告を受けて感謝してる男は世界中にあるでせう  
 か」

「辛い事は同じですわ」

「爾です、君が辛からうと思ふだけに僕」

「もう止しませう」

「君は諦められますか」

「えい諦めますわ」

「あ、君は強いなあ」

「でも其れが一番正しい事だと思ひますれば諦め能うございますわ」

「あ、」と力は仰向さまに柱に凭れた。「夢の様だ」

「夢ですわ」

「悪い夢だつたね」

「いゝえ好い夢、嬉しい事が多かつたわ」

篤子は顔を反けた。何處かで寺の鉦が聞ゆる、次で工場の汽笛！

「もう歸りますわ」

「あ、歸るの？」

「どうかね罪な事をなさらずにね、貴方が環さんを愛してあげる様になつたら其時は御眼に掛りますわ、其れまではね：環さんがお眠つて被居やるから何か掛けてお上げなさいね」

「眠つちや居ない事よ、人を馬鹿にしてるわね散々惚けてる處を見せ付けてさ」  
篤子は立上つた。

「送つて行かう」と力は立上つた。

「私も歸るわ」と環も立た。

三人は黙つて外へ出た。二月の末の風がひゆうく吹いて、霜に凍つた月が燈火もない町の片側を照らして居る。三人は一言も言はなかつた。

「車で御歸り」と力は石屋の角で環に言た。

「私歩きますわ」と環が言ふ。「若し何ならお構ひなくお二人で」

「いゝえ環さんを送つてあげて下さい」と篤子が言た。

「踏切まで送らう」

三人は墓地を抜けて御隠殿の阪を降りた。

「難有う、もう此處で可いわ」

篤子は二人に別を告げた。「どうかね、間違のない様にね、仲好くしてね、左様なら」

終りの聲は慄へて居た。篤子は踏切を越えた、二人は向ふに立て居る。

「左様なら」

二三年前歩き出して後を振り返ると二人の姿が月明りに見えて居る。

「篤さん」と力は呼びかけた、咄嗟に篤子は待ち構へて居たかの如く二三歩踏み戻つた。が直ぐ引返して兩袖に顔を埋めたまゝ夢中に走り出した。

漸やく家の前まで来た、彼女の頭腦は混乱して家の燈火も入口も室の中も疊も天井も眼に入らなかつた。只だ霞の中に一點の光が微に見える。光の前に半ば白

く半ば黒い影が見える。光は佛壇の灯で影は其處に合掌して居るお濱であつた。  
「乳母！私は……私……乳母！私を抱いとくれ」  
氣が弛んだのか彼女は其儘其處に倒れた。

## 一一一

額に手を當て、見ると燃ゆるが如く熱い、お濱は驚いて抱しめた。

「お嬢様什麼なすつたのです」

篤子は唇を動かさうとしたが聲が出ない、お濱の膝に抱かれたまゝぐつたりと頭を垂れた。文太郎は留守總五郎は裏の家に寝て居る、お濱は什麼する事も出来なかつた。漸と枕をさせて蒲團を敷き其處へ篤子の身體を持運ぼうとしたがお濱の力では出来さうもない。

「まあ重い事！」憊う思つたが此時悲しさが胸充滿になつた。赤兒の時から懐に育て、日に月に重くなるのを楽しんで居た、東京へ出る年——十一の年まで厭がるのを無理に背負して見た事もあつた。自分の手を離れた時はお嬢様が娑婆の風に揉まれ始めた時で、これ丈に身長も延び體量も殖えながら一日一刻お氣の休まる



時もない。無理な仕事に身體を使ひなすつて御隠居様の失敗に人並ならぬ苦勞をなすつた爲に此那病氣におなりになつたのだ。恙那事のない様にと先刻家を御出ましになつてから一心に佛様にお祈りしたんだが何の役にも立ちやしない。すや／＼と昏睡してる篤子の顔に我が頬を確乎と押付けてお濱は泣いた。其處へ文太郎が歸つて來た。

「どうしたへ」

「虎さんが是非今夜中に金を持って來ると言てた……あゝお嬢さんが什麼かしたんですか」

「力さんの許へ被行つて今御歸りになると此の通り……」

「あゝ金が出来ないので氣病をなすつたんだ、だから行ちや不可いと僕が言たのに」

「三十圓のお金で大變な事になつたね」

「たつた三十圓！」

「たつたと言ても中々お金といふものはね……一圓の御金で身投をしたり人殺をしたりする人もあるんだからね」

「爾だ、今夜恚うしてる中にも何處かで餓え死をしてる人があるかも知れない」

「有る處には澤山有るだらうがねお金といふものは……」

「なあにお母さん、世中は金ばかりが貴いといふもんぢやないよ」

此時篤子の聲が微に聞えた。

「御結婚なすつてね、ねえ御願ですから」

「お嬢様！」とお濱は摺寄せた。

「謔言だよ」

「何とか仰やつたね」

「僕は知らない」と文太郎は俯目になつて「こりや金の事ばかりでないかも知ら

んよ」

二人が篤子を蒲團に移す時篤子は復た何事かを言た、お濱には聞取れなかつたが文太郎には解つた。

十時は既に過ぎた。昏睡の篤子を看護しながら母子は只だ虎吉の來るのを待つて居た、虎さんが來たら什麼にかなるだらう、若し來なかつたら明日の朝の難儀、お嬢様に此上の辛い思をさせたくない。不圖思ひ出して文太郎は裏の家を見舞つた。寝てるかと思つた總五郎は起きて居た。蒲團の上に大胡坐を掻き凝と電燈を見詰ながら同じ事を繰返して居る。

「お時の阿魔め、畜生ッ、訴訟を起せば五萬圓は此方のものだ」

總五郎が五萬圓の夢を見てる中に虎吉は三十圓才覺の爲に上野の廣小路を歩いて居た。

一一一

安請合はしたものの、元より憊うといふ當途があるのでない、文太郎を返して獨り腕組をして考へて居るとお秀は心配さうな顔をして溜息を吐いて居る。其れを見ると我れながら意氣地のない様な氣がする、四邊を見廻せば破れ蒲團に反古襖壁に貼り付けた四五年前の大小曆がばくりと口を開いて居る、何一つ質に置くものもない。

「困りましたわね」とお秀が言ふ。

「困りやしねえべらんめえ」

大喝したもの、實際困る事は困つたのだ。

「どうかならあ」

ふらりと外へ出る時お秀が身重の身體を苦しさに屈て草履を直してくれた。

「濟まねえな」

外は冷たい風が吹く、何時の間にか上野を通り越した。

「俺の言ふ事を聞いて文的と夫婦になれや可いんだ、併し力てえ奴に首つたけな  
んだから仕様が無え」

腹が立つて二三日音信をしなかつたものゝ扱て慙うなると黙つて居られない。

あの隠居の禿頭を叩き潰してやりたいとも思つた、築地の家へ怒鳴り込んで五萬  
圓を返して貰はうかとも思つた。

「五萬圓！五千圓に負けてやつても可いや、いや五百圓でも可い、仕方がなけり  
や五十圓でも！五圓でも」

ハ、と彼は獨りで笑つた。俺も餘程吝な野郎だな。

「金が欲しい」改ためて唸り出した。

「三十圓、其れが出来なけりやお嬢様が大變だ」

時計が十時を過ぎた。彼は急に氣を揉み出した。「早く／＼早く何とかしたい」  
何とかしたいと思ふものゝ什麼する事も出来ない事を彼は判明と覺つた。文公  
の蒼白めた顔やお濱の吐息や篤子の愁はしげな姿が眼先にまざ／＼と見える。

「俺あ死んでも恩返しをせにやならん」

彼は墓口が落ちて居はしまいかと足元を見詰めたり、路行く紳士を背後から絞  
め殺さうかと思つてひやりとしたりした。

「あゝ三十圓」

三十圓どころか彼の懐には三圓の金さへ無いのである。

「俺は何を目當に此處へ来たんだらう」

と見ると彼は何時の間にか三橋を左に曲つて大溝に添ふて歩いて居た、摩利支  
天の縁日と見えて活動寫眞館から出て来る人々と往き來るさの二筋の人波が暫時  
此の狭い横町を溢れると聽て兩方の出口が透間勝になつた。

十間許前の料理屋の横、少し路幅の廣くなつた處に一團の群集が頭に月光を浴びて上を見居る、今ま群集の視線を惹いて居るものは釋賣の男であつた。人々の頭の上より高く臺を据ゑて正直商會と書いて高張提灯の光の下に立ち、先づ拍子木を二つ三つ打つ。

「金持集まれいやい」大聲に呼ぶと。「おうい」と野次馬共が答へる。

「さあ是は上等の襯衣、駱駝の上等、さあ幾何、く、付けて下さい、さあいくら駱駝の上等」怪しげな襯衣を振て左右に見せびらかし「さあ値段を付けた方は繪葉書を差上げます、さあいくら」

「一錢」と誰か言ふ。

「なに？一錢？貧乏人は引込んでろ」

「ワハ、ハ、ハ、といふたわいな笑い聲が起る。

「さあいくらく」

「二十錢！」

「ありがどう、さあ二十錢」

「二十一錢」

「恐ろしく吝な野郎だ、二十一錢く」

「三十錢」

「ありがどう、三十錢」

「百圓」と子供の聲

「黙つてろ南京米、さあ三十錢」

しばらく聲が續かない。

三十錢く、駱駝の上等五圓の代物だ、さあ三十錢、ちやんと腕が二本通せる様になつてる、釦も付いてる、眞珠の釦、さあ駱駝だ、動物園の駱駝ぢやねえ、獨逸の駱駝、さあ二十錢」

「三十五錢」

「四十錢」

値が段々に上つて到頭折合が付くと。「負けてやれい」景氣好く拍子木を打つ。中には他の買った襦袢を物數奇さうに検査して見てるものもある。

「次は上等の猿股……」

聲の調子、客への應對振、軽い冗談口、群集を手玉に取て刻一刻に商ひを進めて行く老練振、見物人は益々興に乗て人垣の後から、爪立ちして伸び上がつて居る。

「あの賣溜が欲しい」

憊う思つてる途端に。「掏兒だ掏兒だ」慌たしい聲が人群の中から起ると人垣は俄かに崩れ出した。

捕へろ」

「撲つちまへへ」

罵聲叫聲、足音、倒るゝ音、一時に湧き立つと、何かなしに人々は先に走り行く人の後を追うて残るものはほんの五六人。

「畜生め邪魔しやがつたな」

糶賣の男はぶつゝ、吐しながら拍子木を二つ二つ。

「金持来いやあい」

呼べども来るものもない。男はひよいと帽子を摘み上げと。

「蝙蝠ぢやねえか」と虎吉は叫んだ。

臺の上から虎吉を見下して「よう大將、久振だな」といふは正しく蝙蝠の長次であつた。

「うむ仍且お前か」

「什麼だへ儲かるかね魚屋さん」

「何を言てるんだ」と虎吉が言た時蝙蝠は臺を下て煙草入を出し、燐寸を擦て自分の煙管に點け燃えさしを虎吉のに點けさしてやりながら「畜生め俺の邪魔をしやがつて掏兒だくなんて御客を散らしてしまやがつた、悪い奴だ」

「誰が悪いんだ」

「まあ什麼でも可いや、處で何か、俺の婢は仍且お前の厄介になつてるかね」

「あゝ居るよ」

「當分頼むせ、俺だつし什麼、恙うか芽が出だしたら何とかするからね、若し何ならお前に譲つても可い、」

「馬鹿な事を言ふとぶん撲るぞ」

「まあ怒るな、お前は不相替氣が短けえな、併しどうしてまあ俺だてえ事が解つたらう」

「高え處で大きな聲で怒鳴つ居ながら解らねえ事があるもんか」

「其れやまあ爾だな」と蝙蝠は笑つた、活動小屋の電燈がじめくと滅て行くと、人通りが絶え勝に足を俾る客も無い。

「今夜はもう是れきりだ」と蝙蝠は店を仕舞ひかけた。

「面白さうだなお前の商賣は」

「他で見る程樂ぢやねえよ、儲かつたらお前の義理だけは濟まさうと思つてるんだが……」

「まあ過ぎて了つた事は言はねえ事にしやう」

「でも嬢まで世話になつちやね」

「まあ可いよ其那事……だがねえおい」

虎吉は何か言ふべき事がある様な氣がしたが扱て其れは何であるか急に思ひ出せなかつた。

「なんだい」

「俺お前に何か用があつたんだよ」

「嬢の事か」

「爾ちやねえ」

「金の事か」

「金？うむ爾だ、爾だ」と彼は慌て、煙管を藏ひ込んだ。「三十圓貸してくんねえかいおい三十圓」

「三十圓？」と蝠蝠は頭を反らして仰山に頬を膨らし「ほう三十圓、ととと飛んでもねえ」

「駄目かね」

「考えても見ろ嬢まで食はせねえものが五兩だつて持てるかい」

「此の品物を皆な賣たら三十圓になるだらう」

「十圓にだつてなりやしねえ、皆な疵物だぜ」

「爾かな、お前の賣る品物だからどうせまやかし物だらう」

「御挨拶だね」

「ちや歸らう」

「歸るのか、待てよ何處かで何か食べやうぢやねえか久振だ」

「食べたくは無え、俺は三十圓なけりや生きて居られねえんだ」

「困つたな」

「うむ困つた」

「虎的の弱つた面を初めて見たよ」

「馬鹿にするない」

「若し何ならお秀を女郎にでも賣てやれ、構やしねえから」

「野郎今ま一返言て見ろ」と虎吉は詰め寄つた。

「ま、ま、待てくれ、お前は金の相談をしてるのか俺を撲りに來たのか」

「金だ」

「ぢや拳骨なぞ振上げたつて仕様がねえぢやねえか、俺の頭は梅が枝の手水鉢ぢやねえ、敲いたつてお金が出やしねえ」

「能く饒舌る奴だな」

「饒舌らなけりや拳骨が降て來るだらう」

「勝手にせえ」と虎吉は歩き出す。

「勝手にするよ」と蝙蝠は車に箱を載せ終つて「嬬によろしく言てくれハ、ハ、ハ、」  
虎吉はのそり／＼遠ざかつた。と直ぐ背後から蝙蝠が聲を掛けた。

「おい待て／＼、見込があるよ」



「何だい」と虎吉は立戻つた。

「三十圓だね」

「うむ」

「三十や五十の金は御茶の粉だ」

「誰か貸してくれるかね」と虎吉は顔を弗とする程嬉しさが昂みあげて來た。

「だがねえお前」と蝙蝠は勿體らしく腕を拱んだ。「どんな事があつても短氣を出しちや不可えよ」

「うむ」

「俺の言ひなり次第にならなくちや不可えよ」

「うむ」

「文句を言たら三十圓はフ、イだよ」

「うむ、金が出来さへすりや俺お前に打殺されても可いや」

「其んなら可い、俺と一緒に往かう、どんなものを見ても什麼な事があつても黙つてなけりや不可えよ」

「うむ：：併し相手は何だ」

「そら其れが不可え、黙つてなくちや」

「うむ、でも泥棒ちやあるめえな」

「不可え、ぶん撲るぞ：：泥棒なんかお前にさせるもんか」

「何か悪い事を企らむでるんだね屹度」

「約束違ひだぞ、ものを言たら是だ」

蝙蝠は棒切を荷の上へ載せた。

「一體」と虎吉は言掛けたが直ぐ氣が付いて「何處へ行くんだらう」と肚の中へ聲

を葬つた。どうせ碌な事でないかも知らぬ、けれども今となつては塵一本にでも縫らねばならぬ、先の事は先で解る、厭なら止すまでの事だ。彼は恚う覺悟を決めた。

「お前車を曳いてくれ俺は後を押すから」

蝙蝠は虎吉に楫を取らした、二人は和泉橋へ差し掛つた時、何處からともなく一人の爺が現はれた。

「おい頼むせ、今晚は彼方へ廻るから」と蝙蝠が言ふ。爺は黙つて車を請取たと見ると其れは最前イの一番に褌衣を買つた男であつた。

爺に車を渡して二人は赤電車に乗た。一度乗替て永代橋で降りると蝙蝠は黙つて左へ曲つた。

「變な處へ来たもんだ」と虎吉は徐々怪しみ出した。町々の屋根は月に照られて寝静まつた人家の灯が段々に稀になり行くと糧米所の巨きな建物が眠れる怪獸の

如く背中を浮かして居る、何時の間にか霧が少しづつ湧いて來た。相生橋を渡つて月島へ出る、向側は一列に倉庫が並んで、海鼠板が月に光つて居る。

「お前此處を知てるか」と蝙蝠が言た。

「知てるよ月島ぢやねえか」

「うむ爾だ、是から何處へ行くんだと思ふ」

「其りや知らねえ、一體何處へ行くんだ」

「黙つてろ」と蝙蝠は制めて河に向つて石を抛り付けた。遙か倉庫の下の邊に房州行の小さな汽船が二つ三つ黒塗の横腹を出して一點二點の灯影を見せて居る、思ひ出した様に間の抜けた汽笛の音が「ぼうッ」と鳴ると霎時下に碇泊の傳馬船ががや／＼と動く、背後の方には遠く／＼霧を透して洲崎遊廓の空が明るい、虎吉は狐に魅まれた様にぼかんと立て四邊を見廻した。満汐と見えて川口へ掛けて波の音が底唸りをして立騒ぐと、聽て一艘の船が静に／＼船の音を忍んで近付いて

来る。石段の下に停まつたかと思ふと、蝙蝠はむづと虎吉の手を攫んだ。

「さあ一緒に来い」

二人は身を躍らして舟に飛び下りた。

「晚かつたな」と舟の中の男が言ふ。

「虎的を伴れて来たよ」

「なに？」

艚を押しながらひよいと振り返る男の顔？其れは例の親分難波の爲藏であつた。

一五

「什麼して来た」と爲藏は言た。

「蝙蝠が伴れて来たんで」

「ふうむ、どうして……」

「三十圓の金が要るんだから」

「三十圓？けちな野郎だな、手前何時まで金に不自由してんだ、えい小僧ッ」

虎吉がびくりとした、何年振かで此聲を聞く。「えい小僧！」彼は不快な夢を見

る度に思ひ出すのは此の聲である。「おい小僧！」忌々しいと思ふものゝ扱て此の

聲を聞くと頭が重い鐵板で壓へ付けられる様、我ながら反抗の勇氣が無くなる。

「小僧で無えや」と虎吉は漸と言た。

「成程爾だ、失禮した、だがね、おい、一人前の男なら三十兩の金に困つてなく

たつて可いちやねえか、金は廻り持だ、くよく／＼してる奴は間拔さ」

「だつて無えものは仕方が無え」

「これで三度目だせなあ虎、そら汽車の中さ、其れから築地で俺をすつぽかしよ、其れから今度、丁度三度目だ、何時まで経てもものにならねえ奴だな」

「どうだつて可いや」

「ハ、仍且出世の出来ねえ奴だ」

「出世が出来なくても泥棒よりか可いや」

「全くだ、だが其れちや俺から金は借りねえ積か」

「親分は未だ泥棒か」

「いや」と爲藏は塞つて。「泥棒は止めたよ」

「泥棒でなければ金を借しておくんなせえ」

「豪い言ひ草だな、うむ貸してやらあ」

「ちや直ぐ貸して……」

「待てよ、だが今暗だけは俺の仕事を手傳つてくれ」

「仕事つて何ですか」

「本牧まで舟を漕いで行くんだ、お前は海で育つたんだから舟は巧えだらう」

「舟を漕ぐ位は造作も無え事だ、其代りに」

「解つてるよ三十兩だらう、本牧まで三十兩の舟賃か、ばろい商賣だな」

虎吉は立て身仕度をした、苦の中には菰包やら信玄袋やら箱の様なもの籠の様なもの、雑然と積れてある。

「さあ急げ」

狭霧が段々濃くなつて南下りの月はどんい、鈍い色をして居る。虎吉が艀を漕ぎ出すと舟は矢の如く河口を出る。右には品川の町の灯が瞬いて左に洲崎の遠明り、行手にお臺場の影が水牛の背の如く幾つも並んで居る。

「三十圓く」と虎吉は肚の中で繰返した。

「三十圓あればお嬢様が助かるんだ」

突然彼は何事かに考へ及んでぎくりとして船を止めた。

「親分！」

「静にしろ」

「ねえ親分！」

「叱ッ黙れ」

此時お臺場の上に人の聲がした、と何處からとも無く短艇の音が聞える。

「何か唄へ」と親分は命令した。咄嗟に蝙蝠が磯節を唄ひ出した。

「何處へ行くかッ」と水上警察船が怒鳴た。

「羽根田です」と爲藏が答へる。後は音もない。

「急げッ早く、急ぐんだぞ小僧ッ」

「乳母！」

「御嬢ちゃん」と文太郎はつか／＼と戻つて来る。「僕は／＼僕は……」

憊う言たが何か喉に塞まつて言へなくなつたので其儘足を返してお濱の手を取つた。

躑躅に夕日が赫と射して泉水の一ヶ所だけが眩ゆく輝いた。何時の間にか會場に人の影もなく、何處から集まるともなく鴉が五六羽散らばつた折詰の残肴を啄ばむで居る。篤子は何時までも二人を見送つた。

「もう歸りませう」獨りで淋しく言て袴の塵を拂ふ途端、ばさりと袂から落ちた二足の草履！

「什麼して是を環さんと富喜子さんにお渡ししやう」

彼女は黙つて草履を見詰たまゝ霎時拾ひ上げる氣にもなれなかつた。

霎時三人は無言であつた、羽根田の燈臺が霧に抹されて微かに螢火ほどに見ゆる、左の遠き地平線に漁火が物語る如く動いて居る。

「親分！」と虎吉は言た。苦の中で荷物を選び分けて居た爲藏と長次は顔を上げた。

「親分何處へ行くんです」

「本牧だ」

「嘘でせう、先刻御臺場で咎められた時にや羽根田と言たちやありませんか」

「何處だつて可いちやないか、手前は艀を漕ぎさへすれば可いんだ」

「俺は什麼して慙う鈍間なんだらう」と虎吉は自からを嘲けつて艀を停めた。「とつくに氣が付きさうなものだ」

「何を言つてるんだ、舟がぐる／＼廻るぢやねえか」

「廻らうと廻るまいと俺の勝手だ」と虎吉は其處に坐り込んだ。「親分、苦の中の荷物を見せておくんなせえ」

「何だと」

「荷物を見せておくんなせえ、只の代物ぢやありますめえ」

「其れが什麼したと言ふんだ」

「可笑しな事を言ふなよ」と長次が口を挟れた。

「代物を見ねえ中は俺は厭だ」

「ぢや見るが可い」

虎吉は苦の中に首を差し出した。暗いカンテラの灯影に信玄袋や行李から顛倒返した雜物は着類や頭の物時計もあれば置物もある、反物羅紗切、掛軸彫刻品、お寺の什寶とも覺しき佛像、刀劔類、恰がらに骨董店と古着屋を混同した様、中

には嬰兒の無袖羽織や女の兒の被布などもある。虎吉はふいと顔を上げた。

「親分、仍且此商賣は止められねえんですね」

「あゝ止められねえよ」

「これを何處へ賣るんです」

「佳いものは横濱の夷人さんへ持て行くのさ」

「親分、もう可い加減に止めたら什麼です」

「何だと」

「止めて下さい親分」と虎吉は膝に手を突いて頭を下げた。「ねえ親分、此那事は悪い事だ、いくら銭が欲しいからつて人のものを盗むなんて其りや餘まり酷い、俺だつて親分には十三の時汽車で助けられた恩があるんだが、泥棒したものを運ぶ魚を漕いでやつたからつて恩返しにやらねえ、悪い事は止めて下さへ、働らきさへすりや幾らでも金が儲かるんだから」

「何を言てるんだ」と船を押しながら長次が聲を掛けた。「お説法なんか止せよ、お前だつて三十兩なければならねんぢやねえか」

「三十兩は欲しいさ、けれども泥棒の手傳をして貰つた金が何になる、其那汚れた金は俺お御嬢様の前へ出せねえ」

「ぐつぐつ言はずと早く船を押せよそら三角波が近くなつて來た、俺の手にやだへねえや、さあ虎的早くやれよ」

「俺お厭だ、今日限り此の荷物を此の沖へ抛り込んで眞人間になつてくれるんでなけりや俺お厭だ」

虎吉は動きさうにもない。

「押さねえか」と爲藏が怒鳴た。

「厭だい」と腕を拱む。

「どうしても」

「厭だ」

「厭なら頼まねえやい」

立上つた爲藏は右足を高く上げて礎と虎吉を蹴飛ばさうとした刹那！  
虎吉の手は早くも足首を攫んだ。

「何をするんです」

「死ばつちまへ」

振拂はうとする拍子に虎吉は片手を爲藏の帯に掛けて凝と顔を見上げた。

「親分、俺の言ふ事が解りませんか」

一七

「手前俺に手向するんだな」と爲藏は顔を真紅にして言つた。

「手向はしねえ、手向はしねえが親分什麼しても俺の言ふ事を聞いてくれなけりや俺の覺悟がある」

「何を」

「親分とは言はさねえ、俺あ此處で殺して了ふんだ」

「巫山戯た言を吐かしやがるな」

帯を取った手を振ほごいて懐に藏した短刀を取り出す間もなく寅吉は腰を捻つて床板に叩き付けた。

「小僧什麼するか……」

「親分勘忍しておくんせえと」  
虎吉は抑へ付けた手を放さぬ。「俺あ何だかお前



を殺したくなつた、什麼しても殺さなけりや俺あ安心が出来ねえ、お前達は俺を  
間がな隙がな誘拐しに来るんだ、俺其れが恐ろしいんだ、お前達が死ぬか俺が死  
ぬか何方か、死ななけりやならねえ様に出來てるんだ、人を殺すのは悪い事か知  
らねえが、お前を殺す事だけは善い事の様に思ふ、敵同士だ、さあ殺されておく  
んなせえ」

「馬鹿な事を」と長次は臙を停めて虎吉の襟髪を引いた。「止せ、虎的、止せッ」

「邪魔をするな」

「生意氣な言を言ふな」

長次は無手と組みに掛るを足を伸ばして向ふ脛を確と蹴る。

「あいた」長次はびたりと坐り込んだ。此時爲藏は隙を偷んで跳ね起きた。

「しまつた」

白刃が閃めくと共に虎吉は苦柱に身を防ぎ寄せるや否や、苦の柱をめりくと

引抜いた。

「變つちまへ」

「大……親分」と長次が言ひ終らぬ中に柱は空鳴をして爲藏の頭へ落ちた、  
あつと叫んで鞭と倒れる、途端に第二の柱は長次の眉間、よろ／＼となる處を更  
らに第三の柱が肩先へ落ちたから堪らない、長次の身體が棒の如く直立して初め  
は前に傾いたが直ぐ背後へ反り返つたと思ふと、どぶんといふ水の音が聞えた。  
其時虎吉は夢中になつて爲藏の死骸を抱き上げ抱き下ろして居たが聽て同じく波  
間へ抛り込んだ、それすら仍旦夢中であつた。

舟は一上一下、右に傾き左に傾いた。不圖氣が付くと今まで居つた二人が居な  
い。

「俺が殺したんだ」と彼は言つた。「爾だ俺が殺したんだ」

三時間の後に彼は月島の倉庫の間の空地に腕を組んで考へながら立つて居た。

何となく胸が透くやうな心持がする。十三の年から今までの八年間の運命はあの幅の広い四角張た面の親分に握られて居た。掻浚ひの群に入れられ、犬芝居に賣られ、其れから大阪九州と流れ流れて東京へ歸ると泥棒の手先に使はれ、漸と商賣にありつくと舟泥棒の仲間引込まうとする、力づくなら何でもないと知りながら什麼いふ譯か親分には頭が上がらなかつた、丁度猛獸使が虎や獅子を使ふ様に親分は俺を使つた。「小僧ツ」といふ一聲は鞭よりも鋭く聞えた。だが俺は初めて彼奴に勝た、俺の頭を壓へる重石を物の美事に拂ひ退けた、もう俺には恐いものがない、俺の天下だ。俺は仍且強いぞ。

氣が樂になつたので彼は歩き出した數多の傳馬船が林の如く柱を並べて足元に泊まつて居る、岸の方に折り／＼ちやぶ／＼と小さな波が音を立て、夜明に間もあるまい人影、つも見えない。倉と倉との間から犬が一頭飛んで出た。と次で二頭三頭！四五頭の犬が疾風の如く驅けて過ぎる。虎吉はぎくりと立止まつて笑

つた。

「畜生め脅かしやがらあ」

歩み出さうとすると河の中から聲が聞える。

「小僧ツ什麼するか」

虎吉はだち／＼となつて立疎んだ、四邊を見廻すと何ものも見えない。

「氣の故だ、なに糞ツ、死んだ奴が生きて堪るもんか」

急ぎ足で永代橋まで來た。兩側の人家は眠つて居る。突然と彼は慄う思つた。

「自首するなら今の中だ、人が目覺めない中に」

「馬鹿な」と彼は直ぐ其れを打消した。「何を自首するんだ、俺は世間の利益にならねえ奴を殺したんだ、俺にはまだ／＼大事な用があるぞ」

人間の心程不思議なものはない。お秀は一夜まんちりともしなかつた。什麼し  
て晚いんだらう、何處を目當にお金の才覺に行たのだらう、氣が短かい質だから  
誰かと喧嘩でもしてるんぢやなからうか。

婆さんは躰をかいて眠つて居る、薄い蒲團に行火を入れて寢衣まで暖めて置い  
たが、中々歸る様子もない、外ゆく人の足音に耳を敬だて、は若しや其れかと立  
て見る、一時が打つ二時が打つ、最早や足音さへも聞えなくなつた。遠くの方で  
車の通る響が夜陰を縫ふばかりで、寒さがしん／＼と増して来る。彼女は縫物の  
手を休めて霎時我が膝元を見詰めたまゝ考へた。今まで此那に晚くなつた事は  
ない、何か凶事が起つたのではあるまいか。起て戸を開けると月は薄雲の間を泳  
いで町の屋根並は霧に隠れて煙るが如くに見える。彼女は再び立戻つて元の席へ

坐つた。今まで長次と夫婦の時には殆んど毎夜の如くに空圍に泣き明かした、  
れども其れは腹立たしき恨めしき淺間しさの涙であつた。今夜の待明しは恨みも  
なければ腹立たしきもない、只だ其人の出先が案じられる。

彼女は今ま其の二つの異つた心持を種々に考へて見た、頃は長次といふ良人  
があるといふ事を忘れやう／＼と努めて居た、而して自分も忘れた積で居たが、  
虎吉の親切で俠氣で單純で竹を割た様な性質であるのを思ふに付けて長次の狡猾  
で利巧で卑しくて臆病なのを思ひ出さずには居られない。彼女は世間の男といふ  
ものを知てるのは父親と長次と虎吉の三人だけである。父親は兎も角として長次  
と虎吉！同じ男でありながら什麼して此那に人柄が異ふのだらう、穢多の娘で  
あるにした處で女學校へ通つてる時には其れ相應に未來の良人に對して希望や空  
想やらを抱いて居た、父の眼鑑に依て養子にした婿は豈夫にあんなに卑しいもの  
とは思はなかつた。若し出来る事なら虎さんの様に男らしい人を……

思う思つて彼女は弗と吐息を吐いた。私は長次の妻に卑しい人間でも良人は良人だ。激しい貞節心が俄然として今までの冥想を排斥ける。排斥ける下から若し長次が虎さんの様な男であつたらと取止もない望が起る。

何處かで一番鶏が鳴いた、壁を透す霜の氣は襟元を針で突く様。彼女は火鉢に炭を次ぎながら仍且思に沈んだ。と腹の中で微に動くものがある、びっくりと動いたかと思ふと續いて大きく動く、此の動き様は頃日珍らしくはない、お秀は着物の上から靜かに腹を撫つた。撫つてる中に彼女の考が次第く深いく處まで進んだ。

凝と帯の處に手をやつて聞き澄ますと、自分の呼吸が聞える、心臓の鼓動も聞える、猶ほ其の上へ一道の脈管の響、肉の搖ぎ皮膚の慄、其れと通ひ其れと和して胎兒の蠢く神經が胃の方へ腰の方へ全身の響を傳へる。丁度其れは自分の身體の組織が生きてるのか胎兒が生きてるのか解らない様！生きてるものが生きて

るものゝ身體の中に育つて行く、何れが自分で何れが胎兒であるか。

お秀は胎兒の動く度に胎兒を呪ふた。悪人の胤を宿した我身をも呪ふた、けれども呪ひ呪ひつゝ暮らし行く中に彼女は段々胎兒が可愛くなつた。

「什麼せ碌な兒ではあるまい、あゝ此の兒がなかつら」

憊う思ふ下から胎兒が動く、我身も動く、冷えはしまいかと腰に蒲團を巻き付ける、高い處へ手を上げては臍の緒が什麼なるとかで其れも注意する、轉んではならぬ、悪食をしてはならぬ。數々の辛さを忍ぶのも自分だけの難産を恐れる爲ではない。獨り坐つて居ると胎兒が動き出す、丁度其れは何事かを自分に語るかの様又た一寸狎へて自分を驚かしでもするかの様。彼女の冥想は毎も其度に破られる。

虎吉を待ちあぐんで限りなき空想に驅られて居た彼女は今まびくりとして吾に立復つた。「お母さん其那事を思つて私を忘れては不可せん」と胎兒が言たかの様

に彼女は思つた。

「可愛いわ」と彼女は小聲で言った。

「ねえ本當に可愛いわ、母様は坊やが一番可愛いわ」

彼女は虎吉の事を忘れて何時までもく、胎児が生れてから育ち行く未來を思ひ續けた。「男でも可愛い、女でも可愛い、此子は私のものだ長次のものでない私は此の子の爲に生きて行くんだ」

一九

最早朝までは歸つて來ぬ事と諦らめてお秀が床に就いたのは四時過であつた。うとくとなると彼女は夢を見た。其れは自分が美しい女の子を生むた夢である。女の子は五歳になつて居る。お河童の奇麗な髪は日の光に輝やいて林檎の様な頬をして居る。熱く見ると篤子の顔に似て居る。「まあ可愛い事！」とお秀は抱締めて「お前は母さんが好きかへ」と言ふと。「大好きよ」と言て頬摺をする。「御父さんは」と言ふと「無いの」と答へる。急に可愛さうになつて來てお秀は聲を擧げて泣いた。吾れと我が泣聲に眼を覺ますと障子に朝日が射して時計は八時を過ぎて居た。彼女は胸の動悸を霎時静めてる中に胎児が又もや動き出した。「好い子だよ」と胸の中で繰返して漸と起上り顔を洗つて着替へてから虎吉の事を思ひ續けた。

「伯母さん虎さんは未だ歸らなくつて？」と臺所に居る婆さんに聲を掛ける。

「あゝ未だですよ」

「什麼なすつたんでせう」

「氣が揉める事たハ、」と婆さんが笑ふ。

「あら爾ぢやないけれども」

お秀は弗として襖を開けると、何時の間にか其處に虎吉が歸つて居た。火の無い火鉢の前に胡坐を搔いて黙つて居る。

「あら御歸りになつて居たの？」

返答が無い。

「什麼なすつて？」

「……………」

「私寢てしまつて濟みませんでしたね」

「……………」

と見ると顔は蒼白に唇までが色を失つて居る。

「貴方什麼かなすつたんですか」

「什麼もしねえ」と虎吉は言た、聲は曇つて居る。

「私寢坊をしたもんだから伯母さんが御飯の支度をしてくれたのよ、御腹が空いたでせうね」

「何にも食ひたくねえ」

「して篤子さんのお金は？」

「金は出来ねえ」

「困つたわねえ」

「俺は泥棒になれねえから金が出来ねえんだ」

お秀は虎吉の容易ならざる様子を見て取たので黙つて次の言葉を待つた。虎吉

は霎時深い息を續けたが聽て凝とお秀に眼を向けた。

「お秀さん、俺をふん縛つてくんねえ」

お秀は餘りに意外の言葉に打たれて吐息も出來なかつた。

「縛つてくんねえ、警察へ突き出してくんねえ」

「まあ什麼なすつたの？」

「俺はお前の亭主を殺したんだ」

「えつ？」とお秀は眼を睜つたまゝ唇の色を失つた。

「俺がお前の亭主を殺した」と虎吉は一息に續けた、堰き止められた流れが一時に奔り出した様に彼の唇に眼に眉に熱氣が火花の如く閃めき出す。「殺さうと思つて殺したんぢやねえ、殺さうと思はねえで殺したんでもねえ、什麼して殺したんだか俺は知らねえ、多分殺さなきやならなかつたから殺したんだらう、言はせれや幾らも理窟があるが、殺した事は確に殺したんだ、俺は決して自分で悪いとは

思はねえ、人殺しは悪い事だから俺を罪人にするてえなら俺決して罪人にならねえ、彼那奴を生かして置くと俺は生涯眞面目な商賣が出来ねえんだ、だから殺した、なあお秀さん、實を言ふと俺は自首をしたくねえ、男らしく無い様だが未だく御日輪様を拜んで暮らしたい、けれどもお前は長公の女房だ、お前の亭主を殺したんだ、亭主の仇だ、女房が亭主の仇打をするてえのは當然の話だ、自首はしたくねえがお前に仇を打たれるなら俺は逃げも隠れもしねえ、さあ俺をふん縛つて警察へ突き出してくんねえ」

お秀はわつと泣き出した。

「何を泣くんだ、決める事は早く決めてくんねえ」と虎吉は煙管を取上げたが煙草を詰めやうともせず穴が明く程膝頭に突き立て、舟中の仔細を語る。

「さあ俺を連れて行てくんねえ」

「不可せん」とお秀は漸と顔を上げた。

「什麼して？」

「殺されたのは私の良人ではありませんもの、他人です赤の他人です、貴方が殺しなさらうと生かしなさらうと私の知た事ではありません、私は何で貴方を縛れませう、爾那事をしやうものなら篤子さんに何と言はれませう、犬畜生恩知らずになる位なら私は、私は……」

聲が涙に交つて半ばは袖の中に葬られる。

「お前本當に爾思ふか」

「えい」

「勘辨しておくんない」と虎吉はほろ／＼と涙を零した。「だがお前が爾思つても腹の中の子は仍且俺を仇だと……」

「私の子は私だけの子です、私の世話になつた恩人は此の子の爲にも恩人ではありませぬの？」

虎吉は黙つて俯向いたが突然立上つた。

「何も彼も夢だと諦めておくんなせえ、なあお秀さん、俺も恩人でもなければ何でも無え、只だ妙な事が縁になつて世話をしたただけだ、其れを恩に被せると思はれちや困るが、お前が勘辨してくれるなら俺はどうしても生きて居てえ、稼ぎさへすりや面白可笑しく暮らせる世の中だ、もつと稼えでもつと面白く月日を見なけりや男に生れた甲斐が無え、あの二人さへなけりや俺は誰に邪魔される事



もなければ、悪計をして俺を同類にしやうとする奴もない、是からが俺の世界だ、笑はれるかも知らねえが俺は逃げるんだ、仇を打つ氣が無えなら黙つて俺を逃がしておくんなせえ」

「御逃げなさい」とお秀は静に言た。

「逃がしてくれるか」

「えい」と首を低れて「して貴方は何處へ行くの？」

「何處だか解らねえ、西へ行かうが東へ行かうが同じお天道様が頭の上に光るんだ、根かぎり働らいて腹一ぱいの面白い事をするんだ」

「あゝ爾して下さい」とお秀は凝と顔を見上げて。「什麼か立派になつて下さいね」

「お前さんは什麼するかね」

「私、私は什麼ともなりませんわ」

「困るだらうな」

「いゝえ」と頭を擡て「だけれども情ない事になつたわね」

「全くだ、二人は恁那事で別れやうとは思はなかつた」

虎吉は再び腰を下した。お秀は眼に充滿の涙を湛めてはふり落ちるのを憶へて居る。

「何だつて恁那事になつたんでせう」

「全然夢の様だ、勘辨してくんねえ」

「……………」

「悪徒とは言ひ條お前さんの亭主だからな」

「……………」

「お前だつて亭主が殺されたとあつては氣持の可い事はあるめえ」

「其りや爾ですわ」とお秀は明晰と答へた。「だから私は……………」

言葉は突然と絶えた。

「什麼したの？」

「私言ひませう、皆な言て了ひませう」お秀の眼には涙もなかつた。私貴方と一緒に居る事は出来ないわ、いゝえ今貴方にお逃げなさいと言たでせう、けれども實は私も一緒に何處へまでもお伴しやうと思つたのよ、だが仍且駄目で、いゝ、どうしてもお別れしなけりやなりませんわ、何と言ても良人と名の付いた男ですものね、其の男の子が私のお肚の中で生きてるんですもの、悪徒にしろ一旦身體を許した以上は良人ですわね、其の人を殺した貴方と一緒に暮らして居ても貴方も氣苦しいでせうし私も氣苦しいわ、子供が生れたら猶更らの事です、是が他の事であつたら、貴方が他の人を殺したといふなら私は何處へまでも貴方に従いて行きますわ、けれども：仕方が無いわねえ」

お秀は唇を噛んで霎時鼻から息を吐いた。

「俺だつて」と虎吉は言た。「俺だつてお前さんと別れ度え事はありやしねえ、け

れども仕方が無えな、俺に離れたら看すく困る様になるお前さんを捨て、行くなんて全く俺は男ぢやねえ、何だつてお前さんがあんな奴の女房になつたんだらう、お前さんが彼奴の女房でなかつたらなあ」

「自分の良人が殺されたと聞て悲しいとも思へず殺した人を恨めしいとも思へない私は何といふ因果なんでせう」

「あゝ」と虎吉は嘆息した、が急に立上つて草履を穿いた。「もう何にも言ふめえ」「ちやもう行くの？」

「あゝ、左様なら」

「ではね御機嫌よう」

「だがお秀さん、俺はお前さんに話したい事があるんだ」

「私もあるわ」

「もう少し話して居やうか」

「えい」

「いや不可え、仍且此儘だ、左様なら」

「左様なら……篤子さんへ御言傳は？」

「無い、男になるまで會はねえと言てくんねえ」

虎吉はふらりと外へ出た。

「虎さん」とお秀は店口へ出て叫んだ、虎吉は振り返りもしない。春淺き二月の口射が向側の家根くを滑つて寒さうな軒並の影法師を町筋に晝いて居た。

### 善玉と悪玉

#### 一

死ぬるが如き昏睡から覺めて篤子は微かに眼を開いた。彼女の先づ眼に付いたのは蒲團に兩手を突き入れて涙に濡れた眼を凝と自分に向けて居るお濱の顔であつた。

「おうお眼が覺めましたか」とお濱は言つて竊と涙を拭いた。

「氣が付いたかね、大丈夫かね」

噎がれて痰の詰まつた様な聲が頭の方に聞える。其れは總五郎である。

「もう幾時？」と篤子は漸と口を動かした。

「九時頃でございます」

「爾？文ちやんは？」

「仕事に参りました」

「虎さんは？」

「未だ見えません」

「水を頂戴」

お濱の出した湯呑の水を一口飲んで頭を枕に付け、霎時黙つて居たが再びうとくと眠り初めた。此時文太郎は静かに入つて来た。

「什麼ですかお嬢様は」と訊くのも忍び聲である。

「今しがた一寸眼をお開きになつたよ」

「ちや大丈夫だね」と篤子の顔を覗いて、「虎さんは居なくなつた」

「えつ什麼して？」

「什麼いふ譯か知らないけれども今行て見たらお秀さんが獨りで泣いて居た、男になるまでは顔を會はされないと行て出て行つたさうです」

「お金が出来ないから爾那氣になつたんだね、可愛さうに、其れなら爾と話してくれ、ば濟む事なのにね」

「俺が悪いばかりに……面目次第も無い」と總五郎は首低れる。

何れにした處が三々圓の金が無ければ品物を返す事が出来ぬ、朝といふ約束だからもう直き呉服屋の使が見えるであらう、氣の小さいお嬢様に談判の聲を聞かしたら什麼に病氣に障るか知れやしない、其れまでに何とか調達せねばならぬ。「行て来るよ」と文太郎は立上つた。

「何處へ？」

文太郎は答へずに憎乎と篤子の寝顔を睥めたが聽て思ひ決めて家を出た。彼所思ひ出したのは仙七の事であつた。幼さい時に小僧に扱はれて録に給金も貰はなかつたが、其れでも三錢や五錢は毎でも墓口に入れて帯に挟んで居た。築地の邸を出てから音信も無かつたが、つい頃日はがきが来た。「遊びに来てくれ、洋食位

は御馳走するから、其中にお嬢様に御眼に掛りに行く」

「仙どんの事だから屹度多少かは都合してくれるだらう」

恚う思ふものゝ仙七が何處の何といふ家に居るのか解らない。「他の町ではない

仍且兜町に居るに違ひない」

文太郎は再び兜町へ向つた。例の拍子木の音、群集の動搖めきの中を走せ廻り潜り抜けたが一向に其人らしい姿も見ない、一しきり群集が雪顔を打て叫びつ喚きつしたが其れが濟むとぞろぞろ出口の方へと散て行く。文太郎は門に立って一人一人に氣を付けた、仍且見えない。

「もう駄目だ、此上は呉服屋へ行て謝罪するより仕方が無い」

足を返して幾つ目かの小路に曲つたが落膽して往來の真中に立停まつたまゝ前へも後へも動く事が出来なかつた。日がだんく照り付けて大通りの方から光つた埃が舞ひ込んで来る。何處からともなくトウンカチンといふ乾いた音が聞ゆる、

文太郎は見るともなく其方に向いた。音の出る處は鐵格子の付いた窓であつた、一尺許開いた處から玉突臺と其周圍をうろくする人の上半身だけが見える、舶來煙草の匂が薄い煙と共に流れて来る。玉を突いてる人々は何やら高聲に笑つた、三十でなければ敵はない否二十で可いだらう杯と語つてるのも聞ゆる。

「好い身分だなあ」

不圖氣が付いて徐々と歩き出す拍子に窓から聲を掛けたものがある。

「やあ文ちゃんぢやありませんか、あゝ文ちゃんだ、さあ御入りなさい」と言ふかと思ふと姿が隠れて棒を持たまゝ仙七が入口の扉から現はれた。

地獄で佛とは此事であつた。

「あゝ仙どんですか」文太郎は突然近寄た。

「久濶でしたね、お變りはありませんか」

「其れ處ちや無いんだ君、金を貸してくれ給へ、三十圓なければお嬢様が困るんだ、お嬢様は今病氣で居るんだから」

「三十圓？」

「あゝ全く困るんだから、大金だけれども」

「其れだけで可いのか」

文太郎は案外といふ顔色をして黙つた。

「お待ちなさい、三十圓位なら此處にもあるでせう」

袂を探つて攫み出したのは新しい十圓札五圓一圓取交せて凡そ二三十枚の紙幣である。握つた掌に二つ三つ銀貨もあれば燐寸の棒もあつた。

「あつた／＼三十圓で可いの？」

「あゝ」

文太郎は喉が塞る様な氣がして仙七と紙幣とを代る／＼に見比べた。

「君は金持だねえ」

「なあに晩までは危ねえんです、今の中だから丁度可かつた、要るだけ持て御出なさい」

「三十圓で澤山だ」

「爾言はずに是だけあるんだから……皆な持て行かれても困るが……若し何なら何處かで晝飯を食へませう什麼です」

「いや急ぐからは是で歸りませう」

「爾ですか、久振ですな、お嬢様にも御目に掛りたいんだけれども今の處では御目に掛つた處で仕様がなし、もう少しね、もう少し私も店でも有つ様になつたらと思つてね、併し何か變つた事のあつた時には私に知らして下さい屹度ですせ、まあ御待ちなさい其處まで行きませう」

金を渡して棒を持って引込んだと思ふと直ぐ烏打帽を被つて羽織を着ながら出て來た。足には仍且赤緒の草履を穿いて居る。

「全く久振ですな」と仙七は猶も懐かしさうに摺寄りつゝ歩く。「私もねまあ運よく頃は折々當るんでね、什麼か恙うか少しは顔も賣れる様になりましたよ、なにねお金でえ奴は無理な事をしなければ懐に飛込んで來まさあ、まあ來年にでもなつたら店でも持ちたいと思つて居ますが年が若くては信用がありませんからね面白もんですせ七轉び八起と言ひますからね、私の親父が相場でのたれ死をしたのも無理はないと思ひますよ、處で貴方は私の黒犬を知てるでせう、彼は此の

正月まで生きて居たが、お雑煮を食はしてやつたら餅が齒にへばり付いて死にましたよ、妙な事で死ぬものですな」

仙七はのべつに饒舌り續ける、言葉は軽快で矮小ではあるが何處かにきりゝと締まつた處があつて唐棧の着物に唐棧の羽織、お召の前垂をして居る。

「大人になつたなあ」と文太郎は思つた、而してつくづく自分のいかにも半書生半百姓の態度の鈍問らしく考へた。舊友に邂逅つた嬉しさに氣が燥ぎ出してか仙七は猶も言ひ出す。

「何しろね、黒犬は私の倅でせう、八歳ですせ彼奴が死んだ時私は本當に泣きましたせ、お寺へ連れて行て葬式をしましたよ、あゝ私は好きな事ばかり饒舌り出して失禮しました、どうです御隠居様は？」

「昨日相場で失敗つて落膽して居ます」

「爾でせうとも、相場は五十までいすな、六十や七十になつたら生氣が勞れてる

から運が向きやしません、無理ですよ、惜しい事をしましたね私御會したらお止め申すんだつた、其れちや何ですね、其の三十圓てえのは御隠居さんが無理な事をなすつた穴埋か何かですな

文太郎は點頭いた、二人は停留場の前まで来た。

「又た被來して下さい、今度は好い處へ御案内ませう、柳橋にだつて中々話せるのがありますよ」

「何がですか」

「ハ、、」と仙七は笑つた。爾だ貴方は其方でなかつたんだハ、、お嬢様には秘密ですせ、其中屹度伺ひます左様なら」

「左様なら」と文太郎も言た、何が何やら薩張煙に捲かれた様、而して心の中に仙七の性質の激變した事に驚き同時に其の如何にも齒切の好い輕快な調子を讚歎した

三

三十圓の災難は是で脱れる事を得たが、次に出て來たのは篤子の病難であつた激しい熱の高低は二日も續いた、篤子は絶えず譚語を言ふ、而して眼が覺めると周圍の人を一人一人に見廻して物と息を吐き、更らに何物かを探す様にもう一度人々を數へる。

「力さんを探して被居やるんだ」とお濱は思つた 什麼して力さんが被來やらないんだらう」憊う言た時文太郎は首を傾げた。

「力さんが見えたら少しは元氣が付きなさるかも知れないからお前迎ひに行て御出」

「爾ですあな」と文太郎は立上る。

「不可ないわ」と眼つてると思つた篤子が言た。



「何故ですか」

「何故でも」

憊う言た時篤子の閉つた眼から涙が滲み出した。

激しい熱の間にも篤子の苦しい黙想が絶えなかつた、彼は力と環の平和を祈つた、愛する人の罪惡を未然に救ふ爲には什麼しても自分の戀を捨てなければならぬ、憊う思ふものゝ其れは餘りに急劇である、一點の疑ふ處なく今秋の契月の樂しさばかりを想ふて居たのに足元から鳥が立つた様に一瞬の間に二人は別れなければならなくなつた、餘りに呆氣なく餘りに慘酷である。

「あの時にあの話を立聞しなければ可かつた」

憊ういふ愚痴も出る、同時に悚然として墮胎薬を手にして居た環の姿を思ひ浮べる。

篤子の心の中では力の不品行を餘程寛大に見て居る、或は全く許して居るかも

知れぬ、而して彼女の戀は依然として昔の儘に残つる居る、つまり不品行のある無しは戀の分量に何の影響もなかつた。「力さんは私のものだ」此の心は別離を宣告した今日に於ても變りがない。其れだのに什麼して環さんに譲らなければならなくなつたんだらう。譲らなければ力は罪人になるからだ。

自分は立派な事をした、愛のために犠牲になつた、此考へは多少篤子自身を慰さむる事が出来たにしろ、反面には何だか詰らない様な愚弄された様な氣がして終には力が憎くなくて環ばかりが心底から憎らしくなる、篤子には未だ充分の諦めが付かぬのである、否諦める程の時間がない、丁度子供の頓死に驚く母親の様なもので。

醫者に聴くと心臓の衰弱と腦の刺戟から猛烈な神経衰弱が來たのだ、肺にも異状があるから入院させるが可いと言ふ。入院するにも先立つものは金である、三人は蒼くなつて歎息した。

「五萬圓！」と總五郎は言た。「許へると取れるんだ」

彼は何かにつけ、琢磨の拐帯した五萬圓を思ひ出し同時にお時を法廷に呼出して罵倒する時の快心を思ひ出すのであつた。

お濱はお濱で恚う思ふ。「私が東京へ御連れ中さなければ此那に難義をおさせ申すんぢやなかつた」

文太郎は文太郎で恚う思ふ。「虎さんが僕の戀を打明けたもんだから其を氣にして身體が弱くなつたんだ」

而して總五郎は口癖に「俺が悪い、皆な俺から出たのだ」と言て居る。

けれども篤子の病源は三人の知らない處にあるのだ。

四

五六日の後篤子は築地河岸の野病院に擔架で運ばれた。

「金は幾何かゝつても可いから癒る様にして下さい」と仙七は言た。彼は例の輕快な調子でお濱と總五郎を勵ました。三人は病院の近所へ移轉した。

篤子の昏睡状態は長く續いた、眼が覺めると先づ頭に浮ぶものは力の事であつた。力さんは什麼してゐたらう環さんは什麼してゐたらう、二人は睦ましく暮らしてゐるか知らん、恚う思ふ反面に胸の底を揺ぶり動かす嫉妬と不安と果敢なさが拂々と騰る湯の如く擴がり出す、寧ろ眼が覺めずに眠つたまゝ死で了ひたいと思ふ事もある。

「お眼が覺ましたか牛乳を召上れ」

お濱は寢臺の下に蹲まつたきり少刻も離れない、一口でも牛乳を飲むと聲を出

して喜ぶ、飲みたくないと言ふと落膽して吸吞を嘔めて居る。お濱は篤子が牛乳を飲みさへすれば病氣が其れ丈軽くなつたものだと考へて居る、櫛を入れないので髪の毛がばさばさくと亂れて血色のない顔に掛つて居る、幻ながらに其姿を見て篤子は流石に氣毒だと思ひ漸と勇氣を起して牛乳を飲で見せる事もあつた。總五郎は日に三時間だけ——お濱が終夜の看護疲れを休める爲に三時間だけ眠る車にして居る——お濱と交代に篤子の傍に添いて居る。けれども何の役にも立ちはない。彼は膝をきちんと折て坐り兩手を重ねて大佛様の様な恰好に俯目をしながら黙つて居る。人が呼びかけるとぼかんと口を開いて其方に顔を向けるが、篤子の昏睡中は身動もせず味も崩さない、而して折々「五萬圓、お時、琢磨」と小聲に唸つし居る。

文太郎は午前だけ仕事に出掛けた篤子の病氣中は稼ぐに及ばぬと仙七が言たに係はらず彼は仍且根岸まで通ひ續けた。

睡眠中の他は篤子は何も彼も知て居た、彼女の脳は一層明晰に彼女の凡ての神經が一層鋭敏に働く、けれども其れはほんの束の間で眠くなると共に次第に周圍の物體も音響も憎乎として来る。死にたい——と思ふ中にも什麼かして早く元の身體になりたいと思ふ事もある、自分の今までの境遇が幃畫の如く一度に眼に見える事もある、淺蟲の里、海の光、汽車、停車場、築地の家、玉蘭女學校、お時の意地悪な顔、富喜子の冷突、環の悪罵、金杉の貧世帯、十九年辛苦の縮圖が繰擴がる途中で考へが何時の間にか力の方に向く。彼は到頭夜具を被つて果てしもなく泣き續ける。

「死んで了ひたい、早く——」

夢にも其那事を言ふ事がある。或日眼が覺めると文太郎は眼に充滿の涙を湛めて自分を見詰めて居た。

「私今何とか言て？」

「あゝ言ひましたよ」

「何と言て？」

「お嬢様！」と文太郎は床に手を突いて。「貴方は僕に秘してゐる事があるんですね」

「いゝえ」と篤子は微に答へた。

「いや確かに秘してゐる事があるんです、貴方は何故僕に打明けてくれなんいです」

「何にも無いわ」

「其那事を言はないで僕にだけは打明けて下さいね、貴方は什麼して力さんに御病氣の事を知らしては不可いと言ふんです、何か理由があるなら僕に聞かして下さい、僕は屹度什麼にかしますから。貴方の御病氣は其處にあるに違ひない、これだけの事を考へるに僕は三日も掛りました……」

口重い文太郎の語氣は熱氣を帯びた。

「貴方は獨りで考へて病氣を起してゐるよりか僕の様なものにでも御相談なすつて下さつたつて可いちやありませんか、其位の事を打明けて下さらない様な貴方でもありますまい」

「其れはね」と篤子はわな／＼と唇を顫はした。「力さんと私は縁が切れたのよ」

「えつ？」と文太郎は棒立になつた。「其れや什麼してです、什麼いふ理由です」

「其れだけは言はれないわ」

篤子は自分の手で顔を蔽したが聽てふる／＼と痙攣を起した。

「悪かつた、詰らない事を言た」と文太郎は慌て、薬を口に啣ました。

「什麼いふ譯でお嬢様は力さんに病氣の事も報らせず、力さんもあの夜きり訪ねても來ず二人の中は急に他人の様になつて了つたらう」

此の疑は文太郎にも乳母にもあつた、總五郎に相談しても彼はぼかんと口を開いたまゝ氣披がした様に碌に返事もしない。是には何か仔細があるだらう、二人が枕元で彼れや是れやと話してゐるのを聞いて篤子は毎も夜具に顔を埋めた。

或日篤子は憎乎と夢と現の境に天井を見詰めて居た、と其處へ看護婦長らしいものゝ白い姿が現はれた。其れは誰であるかといふ事すら彼女には意識しなかつた。けれども其の聲だけが殆んど別室での話の如くぼんやりと聞取れた。

「どうも實に濟みません」と其人は幾度も繰返した。「重病患者なんですが、婦人室は何れも〳〵充滿でございますし其れに此方は室も廣く患者さんも他のに比

べるとお輕い方でございますから、什麼か一兩日だけでも御同室が願はれますまいか」

「困りますな」と文太郎が言た。

「でも一兩日だけならね何とかして……其れもお嬢様に伺がつてから……」とお濱が言ふ。

「構はないわ」と篤子は夢幻の境から覺めて言た。「先方の方も御困りでせうから」

看護婦長が一禮を述べて立去つた後でお濱と文太郎は左右の道具やら床の下などを綺麗に片付けた。

「どんな人が來るんでせう」

「騒々しい方でなければ可いがね」

二人も篤子も新來の同居者に對して少からぬ不安と好奇心を以て種々に推測し

て居た。と、室の外で足音が聞ゆる。

「あら一等だといふのに随分汚なさうだわね」

「他の人と同居なんですつて？ 厭だわね」

二人の女の聲が廊下から聞ゆる、足音の数が殖えると話聲も殖える。

「厭だく厭だ、私同居なんか厭」

「一日二日の間だから辛抱なさい」

「厭だと言たら厭！ あゝ：：うゝん」と唸聲。

「戸を開け！ 戸を」

男の聲である。篤子はひよいと耳を敲だてた。

「よし／＼僕の手に捉まつて：：」

きがつくと人々の姿がごちや／＼と見える。後ろ向に患者の足を持って居るのは

文太郎であり横の方に正面に患者の腰から上を抱き上げて居るのは力である。

篤子はあつと聲を出したが其れと同時に更らに驚くべきものを見た。患者は環

であつた、後にお時が従いて居る。

「おや！」

「おや！」

「おや！」

「おや！」

文太郎もお濱もお時もお女中のお勝も互に棒立になつて眼を睜つた。而して力は

環を床の上に寝させたまゝ人々に顔を向けなかつた。

「厭だく」と環は半ば知覺を失つた身體を揺ぶらうとして藻掻いた。而して昏

昏と眠り初めた。

「妙な處で御目に掛りますね」と文太郎は冷やかに言た。お時はうふんと横を向

いて看護婦に向ひ。「他の室が無いの？」

どうもお氣の毒様」

「特等は無いの？」

「特等と申しますと傳染病の方だけで」

「不自由なんですね、ちや此室でも可いから一人だけにして下さいな、お金は五人分でも十人分でも出しますから」

「どうも爾いふ譯には參りせん」

「ちや看護婦さんを五人ばかり頼みますよ、一等看護婦をね」

「五人？」と婦長は目を圓くした。

「五人でも十人でも構ひません、特等看護婦といふのはないの？」

「ございませぬ」

「不自由だね、其れなら一寸お待ちなさい」

慥う言ってお時は紙入から十圓紙幣を抜き出し婦長の手に握らした。

## 六

廣くもあらぬ一室に二人の患者、其れに付添の人々を入れるれば足の踏處もない、搗て加へて看護婦五人の請求には病院も驚いた、漸々宥めて三人としたもの、其れすら逆も入れさうもない。けれども黄金の光は病院の窓にも效力があつた。

「濟みませんが寢臺を少し壁の方へ寄せて下さいませんか」と婦長が言ふ。

「馬鹿な事をお言でない」と總五郎は反對した。「一寸だつて此處から動かさせないよ」

彼は喪神者の如く茫然して居たのだがお時の顔を見るや否や急に昔の總五郎に復つた、而してお時が何か言ふ度毎に竹籠返しを食はして居る。

「何間何尺と繩を張つて見い、手前達の方がこれでも餘程巾を占つてるんだ」

喧嘩は是ばかりでない、折り／＼仙七が横鎗を入れる。

「貴方が千兩拂ふといふなら此方でも千兩拂ひませう。」

「お前は私の恩を忘れたんだね、食逃小僧の癖に生意氣な事を御言ひでないよ

「御氣の毒ですがね」と仙七は口輕に受流して。「私は貴方に御恩を受けた事はありませんと、私が恩になつた人はね、亡くなつた若旦那と其處に被居やる御隠居さんだけですよ」

仙七と總五郎の銳鋒にお時は毎も敗軍になるが其代りに彼女の怒は看護婦共に向つて破裂する。持前の癩癩玉が飛び散る時は殆んど眼も向けられない、と一時間も經つと急に機嫌が癒つて今度は自分から努めて人々の機嫌を伺がふ。紙幣が手から手へと移される。怒鳴られる時には腹が立つが金轡には悍馬も柔順になる。恚ういふ餘祿があるので看護婦商賣は廢められない。

お時と總五郎の争ひが激しくなるゝ篤子は毎もしく／＼泣き出すのが常であつ

た、其れを見ると總五郎の銳鋒も鈍つて黙つて了ふ。此の騒ぎの最中にも環は昏昏として眠つて居る、眠らない時には唸つて居る。什麼かすると一寸正氣に立返る、其時の叫びは毎も篤子は眼を覺ました。

「あゝ痛い／＼あゝ苦しい、苦しくて堪らない、什麼にかして下さい、お母さん什麼かして……何を愚圖／＼して居るの」

全で今にも死で了ひさう、誰かに首でも縊られてる様に有りたけの聲を絞り出す。

「私が死ねば可いと思つてるんでせう、どうせ爾でせう、今に死んで見せるわ、力さん／＼」

力はおろ／＼して傍に寄ると急に静になつてわつと泣き出す。と又た罵り立てる。罵られても怒鳴られても力は環の爲すが儘にして居た、丁度彼は器械で作つた人間の様、彼には意識もなければ感情もない。茫然立つて環の顔を見る、而し



て振返つて篤子の顔を見る。涙は果てしもなく零れて遂には堪らなくなつて床に伏し沈む事もある。

或日彼は例の如く環の床に背後を凭らして篤子の寝顔を眺めて居た。

「たつた一言言ひたい事がある」

彼は憊う思つた、不圖氣が付くと眠つてると思つた篤子の睫に露の玉が光つて居た。

「篤子さん」と彼は口の中で言た。

「どうか許して下さい」

死ぬより辛いとは今の力の境遇であらう、一方は心の底から愛した女！一方は肉の爲めに擒にされた女！而も環の病に就ては自分にも責任がある。飲むまじと誓つた墮胎薬を彼女は飲だ、激烈な出血に次で起つて産褥熱！

七

元より環は力を愛してゐるのでない、力は環を愛してゐるのでない、お時といふ無節制な母を有てる環は無節制な習慣の爲に、最初はほんの抑捺半分に又た篤子と力の睦まじさが妬まじさに二人の仲を攪亂してやりたい、篤子に氣を揉ましてやりたい、自分の美貌と自分の手腕を誇りたいといふ淺慕な思付きであつたに違ひないが、木乃伊取が木乃伊になつて、取返しが付かない事になつて了つた。互に尊敬もなく信用もなく愛もない只だ二つの肉の塊が到底片時も平和であるべき筈がない。卑しい肉の香に荒んだ二人は朝夕に反目した、力の良心は間がな透がな胸を刺した。矢先へ新たに起つた問題は上條男爵の結婚申込である。男爵たる當人は植木を弄る事と冬になると獵に出掛けるより他は用のない閑人で、何方かと言たらお目出度い人間であるが、財産もあり爵位もあるといふ事はお時の心機

を一轉せしめた。「力さんなぞより餘程可い」恚う思ふと矢も楯も堪らない、「何だつて力なぞと不品行をしたんだ」と今更ら環を責めた。母子の喧嘩は絶えなかつた。環は自暴になつて墮胎薬を飲んだ。

お時は驚いたもの、肚の中では寧ろ其の方が可いと思つて居た、身體に障りがなければ此れで華族様の夫人になれるんだ、彼女は後日の榮華を夢みて現在の罪の報を樂觀して居た。けれども環の容體は段々に變つた、出血の後に更らに産褥熱！お時は急に慌て出した、而して前後不覺の環に向つて怒鳴つた。

「何だつて其那馬鹿な行爲をしたんだい」

淑女及び紳士諸君！著者の斯る汚らはしく且つ恐るべき記述を以て諸君の眼を汚した事を實に残念に思ふ、けれども斯る出来事は今日の社會に決して稀有な事でない、吾々は斯る恐るべき罪惡に對して飽くまでも警戒せねばならぬ、忌まはしい事件は熟視するに堪へぬものだ、熟視に堪へぬ事までも詳に觀察して自分

を反省する事は人生に最も必要な事であるまいか、單に汚らはしい事として顔を反け眼を閉ぢて避けるのは自己に對して忠實なものでない、著者は更らに環や力や篤子やお時の記述を進めたいと思ふ。

或日方は例の如く環の枕許に坐つて居た。環は日増に病勢募り行く、其の窶れた顔荒い息遣、白粉の香が剝落して生地の薄い額際に黒ずんだ暗い色が滌ふてるのを見ると、憐愍と嫌惡の情が代る／＼に湧いて來る。誰の罪であらうか、環の罪であらうともお時の罪であらうとも、要するに自分も其の一半を負はねばならぬ。什麼して恚那事になつたのだらうか、環が生命を棒に振つて了ふとする自分分は生涯を棒に振た様なものだ、環の肉が亡びる、自分の靈が亡びる。扱て此の將來は什麼なるであらうか。

彼は此儘逐電して行方を晦まさうかと思つた。「併し」と又た思ひ返す。「其れは男らしくない、自分の播いた種は自分で刈取らねばならぬ、荆棘の責苦を受けや

うとも此儘甘んじて坐つて居るのが男子の道だ、百千の人に笑はれる耻辱は忍ぶべしとするも只だ一人の篤子に見下けられるのは辛い。此上は出来るだけの介抱を盡すより他に道がない。

「潔よく天罰を受けるんだ」

青ざめた顔に決心の微笑を浮べて環の手を取り脈搏を數へた。と環は急に眼を覺ました。

「悪魔！」と彼女は叫んだ。「悪魔は何處へ行つて？悪魔がく」

熱した眼に枕の左右を見廻す。

「誰の事ですか」

「誰つてくあんな女よあの人よ」

「私の事かい」とお時が言た。

「無論だわ、爾よく貴方は悪魔よ」

八

「何を言ふんです、親に向つて」とお時は苛立たしく言た。

「悪魔！」と環は起上らうとして頭を枕に落した、で又た續ける。「力さん、これが悪魔です、私を殺す悪魔です私が慫うなつたのは此の人の故です、貴方でもなければ私でもないわ、悪魔く歸つて下さい」

「其那事を仰しやるもんでありませんよ、お動きになると御病氣に障りますから静として被居やい」と看護婦が言ふ。

「悪魔だから悪魔だといふのよ、皆な黙つてお居で、私は言ひたい事を言ふんだから」

「其れはね」とお時は腹立たしさを怵へて優しげに顔を覗き。「全快なつたら緩り私が聞きませう、何しろ早く病氣を癒さなければねえ力さん」

救ひを求むる様に力に眼眇した、けれども力は一言も言はなかつた。

「いゝえ私皆な言ふわ、どうせ私は死ぬんですもの、死ぬ前に言つて了はなけりや心残りだから……爾よ私死ぬのよ、お母さんが私を殺すのよ」

「人間の悪い事をお言ひでないよ」

「人間の悪い事をなさるからぢやないの？ お母さん、貴方は私を何だと思つて？」

「私の大事の娘ぢやありませんか？ ですからね……」

「大事の娘に何を教へて下すつて？ 什麼な幸福を授けて下すつて？ 力さんに私を煽つたのは貴方ぢやなくつて？ 而して其次に男爵に乗り替れと言たのも貴方ぢやなくつて？」

「環！環！」とお時ははら／＼して宥めに掛つた、氣轉を利かして看護婦共は室を出た。

「力さん什麼かしてやつて下さい」とお時が言ふ。

「言ふだけの事は言はすが可いでせう、僕も甘んじて聞きませう」

「其れが可いや、面白い」と總五郎は室の隅から聲を掛けた。お時の顔は恐怖に満ちた。彼女はわな／＼と慄へて囁やく様に言た。

「環！御母様が悪けりや謝罪るよ、何も私はお前を幸福にしたいと思つたばかりなんだからね」

「是れが幸福なの？ 死んで行くのが」と環は泣聲になつた。

「でもお前が彼那藥なぞ飲むもんだから」

「飲まなきやならない様にしたのは誰ですか」

「私の故ぢやないよ、自分の事を考へて御覽」とお時は最早自暴氣味になつた。

「貴方こそ自分を考へて御覽なさい」

「いゝえお前は自分の落度を考へた事がないだらう」

「貴方と同じ様にね」

「全くだ、二人とも人の缺點ばかり探してゐるんだからな」と總五郎は交せ返す。「なあお時、娘の嫉は母の役目だ、環が慫うなつたのはお前の嫉が悪いからだ、什麼だ文句があるめえ」

「ぢや、私が悪いと言ふんですか」

「爾ともく環がお前に悪魔てえ折紙を付けたぢやねえか」

「ふん」とお時は蒼白になつた。

「悪魔ですか、其れぢや私を悪魔に嫉けたのは誰ですか」

「其れは俺だよ」と總五郎は平氣に言た。「俺は悪魔の親だお前は悪魔の娘、環は悪魔の孫だ、俺の一家は皆な悪魔だ、其れが什麼したてえんだ、えいおい悪魔は什麼したてえんだよ、だが俺はお前の様に親不孝ぢやねえよ、義理知らずぢやねえよ、篤子を苛めやしねえよ、些とは人間らしい處もあるんだ、お前の様に頭から爪先まで悪黨ぢやねえ、味噌漬の悪魔ぢやねえんだ、文句があるなら此室を出

ろ、打殺してやらあ、お前を殺して俺も死なあ、環も死ばつて了やあ、財産は篤子の方に復つて行くんだ、什麼だ俺と一緒に死んでくれねえかよ、三人の悪魔が死んだら世間が喜ぶだらうせ」

「死ぬわくく」と環はがつくりと頭を枕に埋め仰向になつたまゝ眼を塞つて叫んだ。

「皆な死ぬが可いわ、私一人ぢや死にません、力さんも死んで下さい、逃げやうたつて殺して見せるわ、其れから今一人：：今一人：：私什麼しても殺さなければ……」

熱に襲はれた眼を凝と篤子の方に向けた。斯る騒も知らずに篤子は靜かに眠つて居た。唇の邊りの微笑は何を夢みてるのであらう。

罵り疲れて環は眠つた、けれども三十分と経たぬ中に又眼を覺ます。

「可いわく」と彼女は夢中で叫ぶ。「私が眠つてると思つて皆なで私の悪口を言たつて私ちやんと聞えてるわ、幾らでも言ふが可い」

「誰もお前の悪口なんか言やしないよ」

「秘したつて知てるわよ、早く死んで了へば可いと言てたぢやないの？あゝ私死にたい、死んだら皆なが喜ぶでせう」

聲を立て、潜然と泣き出すと、霎時經つと本當に熟睡の躰が聞えだした。其頃篤子は漸と眼を覺ました。彼女の瘡せた顔は兩頬だけ微かに紅みを帯びて居た、其れは醫師の眼から見ると略血の前兆か、腦に異状のある状態であるに拘はらずお濱や文太郎には此日の篤子が一段と美しく見えた。

「まあお嬢様は何といふ好いお顔色でせう」

「爾？」と篤子は嫣然してお濱の出した手鏡を睇めながら「私今ま嬉しい夢を見たのよ」

「まあ什麼な夢？」

「お國の夢よ、そら淺蟲の裸岩よ、彼處で文ちやんと虎さんと私と義經の話をして居たのよ、遠くの對岸の霞んだ處は三廐だつてね、波處から義經が蝦夷へ渡つたんだつて文ちやんが言ふのよ、すると虎さんは俺は義經になるんだて爾言ふのよ、文ちやんも義經になるんだて言ふの、爾すると私は女だから何になれば可いでせうと言ふと赤ん坊のお母さんになれと誰か言ふのよ、あゝ私お母さんが無いから皆なのお母さんになるわと言たの、御天氣が快くて波がきら／＼光つて白い鳥が幾つもの飛んで本當に好持だつたわ」

「其りや實に可い夢ですね」と文太郎は例の重い調子で慰め顔に言た。

「私折り／＼浅蟲の夢を見るわ、昨日は瘤の和尚さんの夢を見てよ」

「お前は神様の様な女だ」と總五郎は涙を流して言た、彼は什麼かすると呆然して居るが、お時に對する時だけは昔の様に怒鳴る喚き立てる随分亂暴な言葉を並べた。爾かと思ふと篤子が何か少しでも優しい言を言ふと小兒の如くめそ／＼泣き出すのであつた。

「全く神様だ、此の室には神様と悪魔が居るんだ、今の今まで親を恨み人を恨んで有りつたけの悪口を並べて居た環に比べるとお前はまあ何てえ優しい心掛なんだらう」

篤子は嬉しさうに語り續けた、話は凡て浅蟲の事であつた。

「好い處だ、本當に好い處だわね」

「東京の様に嘔吐者が居ませんからね」とお濱が言ふ。

「もう一返行つて見たいわ」

「早くお癒りなさいませ」

餘り饒舌り過ぎしては熱が出る虞があると文太郎は注意した。

「爾ね、ちや私もつと眠るわ、私夢を見るのが楽しみよ」

「夢だけですか」

「だつて眼が覺めると詰らない事が思ひ出せるんですもの」

「詰らない事？」と文太郎は問ひかけて急に口を噤んで力の方を見た。力は環の裾に頭を押し付けて身動もせず居た。

篤子の眠は極めて長く、其れに反して環は半眠半覺の状態であつた。すや／＼眠つてゐるかと思ふと直ぐ眼を覺まして怒鳴り出す。流石の看護婦共も三日と續くものはなかつた。此夜は特に熱も激しく呼吸も不正であつた、晝からの叫び續けに病勢を募るだけ募らした。母を罵り祖父を罵り凡ゆる人を罵つて果ては死にたくない泣く。

「静かにして下さい、僕が思ふに何人も側に居ない方が可いでせう」  
 憊う言て力は人々を去らした、「僕が添いて居るから大丈夫です」

「其れが可いでせう」とお時等は室を出た。其れは夜午過であつた、篤子の傍にはお濱が寢臺の下に床を敷いて海老の様に足を曲げて寢て居る。病院の夜は墓場の如く静かである、折り／＼廊下の遠くで草履を曳する足音や氷を砕く様な音が

するだけで、看護人も病人も二時頃は夢の時刻である。

力は環の手首を取て脈を檢べた、罵り疲れた環は眠つて居る。薄暗い電燈の下に横たはつてゐる蒼白い顔！髪は解いた儘に枕の外へ翻れて骨立た額の兩隅、げつそりとした頬骨、ばつくりと開いた口から前齒が二三本突出て時々太い息をするかと思へば直ぐ消ゆる様に静かになり行く。「此の女は！」と力は顔を見詰めて肚の中で言た。「此女は死にかけて居るんだ、俺に報ふべき罰が此女に報はれた」  
 力の心に二様の問題が起つて居た、其れは今初めての事でない、久しい以前からの問題である、一つは環の病氣は環自身が招いたもので自分とは全たく無關係なものであるといふ自己辯解である。一つは環も悪いが自分も悪い自分は決して責任を逃れる事は出来ないといふ良心である。

後者の方に決心はしたものの、環の瘡せ衰へた顔を見、悪罵叫喚を聞く度に彼は以前から肚の底にもや／＼して居る嫌厭の情が胸充滿になつて来る。「什麼して



此那女と悪縁を結んだのだらう」取返しが付かぬ事と知りつゝも、此女の爲に自分の肉體も靈魂も名譽も未來も葬むつて了ふのは堪らなく惜しい。憊う思つてる中に此女の胸を抱き此女の手を握り浮はつた言葉を交はした習慣的の觸覺が何時の間にか頭腦にそろ／＼と湧いて来て、美しく艶やかに眩惑的な環の姿が閃々と眼に浮んで来る。彼は什麼かして爾いふ姿を思ひ續けて不健全な考へに身を任せたら、此那に良心の責苦に苦しまずに居られるだらうと思つた事は屢々である。で今ま彼は環の顔を見詰めながら什麼かして環を好く思ひたいと努めた。と環は夢中で叫んだ。

「皆なで私が死ねば可いと思つてるんだ、畜生ッ悪魔！」

襟元から水を浴びせられた様に力は吾に復つた。

「厭だ／＼」と彼は肚の中で叫んだ。

「俺は逆も此の女と一緒に生きては居られない、俺には俺といふものがある、如

何なる場合にも俺は自己を捨てる事が出来ない……死んでくれ、早く死んでくれ

お前が死ななければ俺が困る」

彼は輝やく眼を以て環の顔を更らに深く見詰めた。其の眼は恰かも自分の眼の中から死の光を環の顔の中に注入れるかの如くであつた。

「死んでくれ／＼」と彼は繰返した。

「若し死ななければ俺は逃げる許りだ」

彼は卒然として握つた手を放した。「看病なんて愚な事だ、夜が明け次第俺は逃げるんだ」

「爾だ、其れが可い」と力は決心した。「今ま此女が呼吸をして居る、脈が動いて居る、どうせ死ぬ身體でありながら微かながらも生命が續いて居る、生きたいと思つて居る、生きて居ても害あつて益のない女、今死ぬ方が幸福かも知れぬ女！、其れでも生きやうといふ力が働いて居る、俺は病人でない、仕事は澤山にある、俺は何しても慫うしては居られない」

力はころりと横になつて枕に頭を付けた、彼の心は今ま什麼なつたつて構はないといふ自暴氣味に充たされた、彼の頭腦は此の決心と共に極めて平靜になつた。數日間の疲労は急に彼を襲ふた、彼はうとうとと眠つた。

幾時間或は何十分眠つたか知れぬが力は不圖何事か室内に起つた様な氣がして眼が覺めた、と見ると篤子は今も寢臺を下りかけて居る、寢卷に細紐を締めた腰

はほつそりと瘠せて片足を床に突き、兩手を寢臺に突いて、する／＼と滑り降りる。力は俄かの驚きから聲も出なかつた。半ば眠氣に捉へられてる彼は殆んど夢の様に思へたのであらう。

寢臺を滑り降りた篤子は踏跟として環の寢臺に近寄た、環は胸も露はに夜具を匆ね退け片足を膝の上まで寢臺の縁に抛げ出して今一動きて身體が轉がり落ちさうになつて居る、篤子は瘠せ衰へた白い腕を差し伸べて其れを撐へた、而して靜かに／＼少しづつ、身體を直してやつて聽て夜具を胸深くふわりと掛けてやり吻と息して環の顔を睇めたが霎時首を低れて泣いて居たらしい。力は最早すつかり眼が覺めた、が此時彼は一種の好奇心に驅られた。

「何をするんだらう」

其れとも知らずに篤子は環の水囊を直して掌を鼻の前に翳して呼吸を檢べ、何事が首肯して再び水囊の位置を替へやうとした時、環はばつと口を開いた。

「水！」

篤子は黙つて吸吞を啣ました。チウと響さして。「薬は？」

篤子は途方に暮れた、薬が三種もある、何れを飲まして可いのか解らぬ。彼女は牛乳を取上げて硝子の管を啣ました。

「これぢやないわよ」と環は怒鳴つたが此時彼女は凝と篤子の顔を見詰めた。

「人殺し！」と彼は叫んだ。「毒を飲ませたんだね、毒をく、あゝ硫酸臭い、喉が焼けた喉がくく」

「環さん」と篤子は穏やかに制した。

「貴方私がお解りになつて？」

「解つてるとも、えい解つてるとも私を殺しに来たんだ、お母様と二人で私に毒を飲ませたんだ。」

「氣を静めて下さいね、私何で貴方を殺しませう、私はね今晚初て貴方の介抱を

するんぢやありませんよ、昨夜も一昨夜も、皆さんが疲れて被居やるからね、あ私これだけ身體を動かすのも漸となんですもの、其れもね、貴方の御病氣が癒る様につて思つてゐるからではありませんか」

「毒よく毒を飲ましたのよ、あゝ私殺される、誰か来て……」

「環さん」と篤子はおろく聲で言た。「貴方は私にだけは何と仰しやつても可いけれども他の人に其那事を仰しやつては不可せんよ、誰が貴方に毒なぞ飲ますもんですか、ねえ早く癒つて頂戴ね、御一緒に退院する様になりませう、ね、ね、環さん

「彼方へ行け、く、あゝ私今殺される」

「貴方はどうしても私の心がお解りになりませんか？ 氣を落着けて頂戴ね」

環は眼玉をぐつと反らしたが聴て臉を閉ぢてうんく唸り出した。凝と見入た篤子はほろりとしたが聴て重さうな足を引摺つて自分の寢臺に復つた。

足数はほんの二三歩であるが、疲れた身體は眞直に立つ事さへ出来ない、篤子は我れと我が裾を踏んでよろ／＼と寢臺に倒れた。

「危ない」と力は初めて聲を掛た、而して突如篤子の身體を起してやつた。

「什麼かしなかつたですか」

「いゝえ」

床の上に抱き上げて寝かし付けたが力が背後から胸の邊りに廻した手は何時までも離れなかつた。

「難有たう」と篤子は抱かれたまゝ小聲に言た。力は黙つて居る。

「大丈夫だから環さんの方を見てあげて下さい」

「環なんか什麼なつたつて構やしません」といふ力の聲は微かに顫へて居た、而

して無言の中に篤子の耳根の邊りに熱い息吹が心臓の鼓動と共に聞えた。篤子の鋭い感覚が早くも何事か起るのであるまいかといふ不安に襲はれた、けれども彼女には力の手を拂ひ退ける咄嗟の勇氣が出なかつた。

「篤さん」と力は壓へられた様な聲で言た。「篤さん、僕は什麼したら可いんでせう」

「手を緩めて下さい苦しいから」と篤子は漸と言って、力の手を静かに押しやり其儘枕に額を當てた。

「僕は什麼したら可いでせう、僕は什麼する事も出来なくなつた、僕の行くべき道を教へて下さい」

「貴方は既に御決心なすつたのぢやないの？」

「決心？其の決心は何になりますか、僕は生きてる人間でも、希望もなく未來もなく苦痛ばかりの中に日を送りて行けませうか」

「其ちや什麼なさらうといふの？」

「僕には解りませんが、無論僕には過失があります、けれども僕の過失に對する刑罰は餘りに苛酷です、貴方に別れてから今日までの苦痛だけでももう充分です、此上は僕を苦しめるなら僕は天を呪ひます神に反抗します、僕は今ま環を捨て、遠く走らうと考へたのです」

「逃げなさるの？」

「爾です、爾しなければ僕は生きて行く事が出来ません、恚う思つたが併し篤さん僕に、其れも出来なくなつた、貴方が不自由な身體を起して環さんを介抱した様を見た時、僕は逃亡の心が無くなりました、多年仇敵の如くに貴方を迫害した事に對して貴方が一點の怨みもなく我れを忘れて環を護るといふのは何といふ美しい心だらう、僕の決心が鈍り初めると共に、僕は益々苦しくなりました、僕は何故環の誘惑に捉へられたらう、僕は何故永久に篤さんを失なつたらう、貴

方の美しさと環の醜さが眼前に對照されて居る、僕は石を拾つたために珠を失つた、地獄へ墮ちて天國を失なつた、其の天國は依然として頭の上に輝やいて居る、此那残酷な事はない、僕は厭だ、どうしても厭だ、僕は貴方を失ふのは厭だ元の通になつて下さい、僕を救うて下さい、僕の問題は簡單です、死か生か、二つの中の一つです、其れは貴方の返答次第で決まるんです」

力の顔は熱情に燃えて居る、一語は一語より鋭どく終りには自から迸ばしる情を抑へかねて只息吹が炎の如く閃めき迫る。

「貴方は今更ら何故其那事を仰しやるの？」

篤子の唇は顫へて居た。

「何故でもありません、僕は貴方を愛してるからです、僕は貴方が無ければ生きて居られないからです」

「あゝ貴方！」と篤子は兩耳を塞いだ。

「いや聞いて下さい」と力は摺寄た、彼の眼は充血して彼の凡ての筋肉が充奮の情に硬ばつた。生命を賭しても我身に降りかゝる運命と戦かはぬばならぬといふ覺悟は寧ろ自暴氣味に見える程篤子の眼にも慘らしく見えた。

「僕は我儘です、自己主義でせう、けれども僕が貴方を愛してるといふ事だけは眞實です、自ら犯した罪は僕自身も明らかに認めます、天罰を逃れやうとはしません、併し僕が罰せられた爲に貴方を愛する資格がないとは思へない、僕が罰せられたといふ事と僕が貴方を愛するといふ事は別問題ぢやありませんか、乞食でも非人でも盜賊でも殺人者でも、人を愛する權利を剝奪された例は聞いた事はありません、僕は自分の罪を思ふと同時に貴方を愛する念が益募るばかりです、實際今日までの苦痛だけでも僕をもう期滿免除にしてくれて可いちやありません

か、此上の刑罰は餘りに酷です、僕を助けて下さい、光を與へて下さい、僕は生きる人間です、これからも生きて行きたい」

「什麼すれば可いの？」と篤子は何もかを恐るゝ如く微かに言た。

「僕を愛して下さい、元の通になつて下さい」

篤子は黙つて顔を蒲團に埋めた。

「貴方は僕の罪を許してくれたんですね、罪を許してくれるなら僕を元の僕だと認めて下さる事も出来るでせう」

「其れは爾思ひますわ、けれども……環さんがあるぢやありませんか」

「環は死にます」と力が言た。

「えつ？」

「環は死にます、死んで了へば僕の責任が無くなる」

「貴方は環さんの死ぬのを待つて被居やるの？」

「爾です」

「卑怯者！」と篤子は突然裂帛の如き聲で叫んだ。「卑怯者！卑怯ですわ、下劣ですわ、私は貴方を其那方だとは思つて居なかつた、まあ貴方は何といふ方でせう」

「卑怯と言はれても仕方がありません、僕は生きて居たんだから」

「其れが男なの？其れが今までの貴方なの？まあ男といふものは其那ものなの？弱い女を苛めて自分だけが助かれば可いなんで……ハ、ハ、ハ、」

と篤子は限りなく笑ひ續けた。

「篤さん」と力は心配氣に顔を覗いた、如何なる亢奮と雖も此時の篤子の状態に比ぶべくもない、彼女の頬は美しい血の色に輝やいて彼女の眼は絶望と憤懣に硬定して居る、肉といふ肉、筋といふ筋は石像に彫まれた皺の如く少しの動きもない、而してキリ／＼と齒軋りをしたかと思ふと直ぐに又た笑ひ出す。

「篤さん／＼確乎して下さい」と力は環に氣を置いて聲を忍ばして言つた。「篤さ

ん、僕が悪かつたら謝罪る、篤さん僕です、僕が解りますか」

「解ります」と篤子は明晰と答へた力の握つた手をぎゅつと握りしめ、穴の明く程力の顔を見詰めたが、其の眼が一點隱約の間に動いたかと思ふと彼女は急にかつと泣き出した。

「篤さん／＼」

「觸つて下さるな」と篤子は力の手を拂ひ退けて。「私もう生きて居ても詰らなくなりまして。私貴方を此那人だとは思はなかつた、貴方が環さんと什麼な關係があつたにしろ、其れは一時の氣の迷ひで仍且貴方は昔の貴方、男らしい方だと信じて居ました、身體に過失があつたにしろ貴方の靈は潔い事だと思つて居ました、彼様いふ理由で貴方と別れなければならぬ事になつた時、私の心の中は何だつたか其れは貴方にだつて充分お解りでせう、私が身を退いたのも貴方と環さんの爲を思つたからではありませんか、其れだけに私は貴方を愛して居ました、

諦めやうと思つても諦めきれず私は此那病氣になつたのも其の爲ちやなくつて？  
けれども私には楽しみがありました、苦い楽しみ！悲しいながらも嬉しい楽しみです、  
其れは他でもありません、縦令一年でも二年でも貴方に愛され愛しもして兄妹の  
様に夫婦の様に仲よくして頂だいた事は私の生涯の記念です、人間は一生に一度  
戀をしなければならぬ、戀は女の花時であるといふなら私はもう此の一二年の  
間に立派に花時を過ぎて来たのです、其れだけが私の楽しみです、今後何年何十  
年生きやうとも又た什麼なに辛い事があらうとも、此の一二年の事を憶ひ出して、  
貴方の様な立派な方と靈と靈を委せあつたと思へば、其れだけで是から先の永い  
月日を楽しんで送られるのです、其れなのに今ま貴方は御自分の事ばかり御考へに  
なつて環さんや私の事は少しも考へて下さらない、弱い女を病人にしながら其れ  
で死んでくれゝば可いなぞと仰しやる、死なゝい中から逃げ支度をなさる、私は  
其那男だとは思はなかつた、其那卑しい方なら私はお慕ひ申すんじやなかつた、

今日まで生涯中の嬉しい記念だと思つ居たのが反對に生涯中の汚れの記念にな  
つて了ひました、もうく私に楽しみも何にもない、何卒私の傍へは寄て下さいま  
すな



此那に鋭く此那に大膽に物を言たのは恐らくは篤子が生れて初めてであらう、言はれ、ば言はれるだけ力は篤子の赤心に打たれた、これだけに美しい女を何故我が妻とする事は出来ないのだらう、又しても復らぬ未練が起る。

「僕は什麼しても貴方を斷念する事は出来ません」と彼は夢中に叫んだ。篤子は最早や亢奮から冷めて凝と力の氣狂はしい状を見た。

「貴方は私を愛して下さるの？」

「無論です」

「其那に私を愛して下さるなら何卒環さんを愛してあげて下さい、環さんを捨てなさるのは私を捨てるのと同じです」

「何故其那事を言ふんですか」と力は頭を掻き撈つて言た。蒼白めた顔、口元の

痙攣、血走つた眼、而して寧ろ絶望的な遺瀨ない溜息！篤子は恍然と睥めたが纏てほろ／＼と涙を零した。

「貴方は御變りなすつたわね、昔の貴方と今の貴方と什麼して此那に異ふんでせう、もう私何にも言はないわ、私は過去の貴方を什麼に美しく見て居たでせう、其の美しい過去もなくなつて、是から貴方を思ふ度に屹度いやなく、今の貴方を思ひ出しますわ、貴方は私の過去を暗くして了つて又た將來の樂みも失くして了つたんですもの、考へて御覽なさい、環さんほど可愛さうな方は他にありませんわ、お母さんに厭がられお祖父さんに厭がられ誰一人味方になつてあげないぢやないの？頼りのない病人を捨て、行く様な貴方とは私知らなかつたわ、もう止ませう、私疲れたから眠るわ、何と仰しやつても私は貴方を愛する氣にはなれませんもの」

「本當ですか、什麼しても」

「えい」

「解りました」と力は身體を退いて茫然立つたが、臆て足を返して環の裾に突伏したまゝ、霎時動かなかつた。「言ひ過ぎしたか知ら」と篤子は胸の中で思った。「力さん」と呼びかけて見る。力は答へなかつた。篤子は急に淋しくなつた。

「力さん、此那厭な思をして別れるのは氣掛りになるから氣持快くお別れしませう」

力は仍且黙つて居る。氣持快く別れると言つた處で什麼ともなるものでない。到頭堪へきれなくなつて顔を夜具に埋めて歎歎あげた。と此時お濱が靜かに起き上がつて篤子の額に我が頬を押し付けた。

「お嬢様！能くお諦めなさいました」

泣き疲れて篤子は眠つた、お濱が窃と涙の痕を拭いてやつた頃は微に鼾も聞え出した、其れから二三時間、お濱は側目も振らずに寝顔を覗いて居た。

篤子は夢を見た、其れは例の淺蟲の海岸である、波が光つて天が晴れて對岸の岬が青々と黛を曳いて居る、彼女は裸島の岩の上に腰を下して泣いて居た、岩の周圍は潮が満ちて白い泡が渦巻いて居る、歸らうと思つたが歸られない彼女は心細くなつて陸地を見やると其處にお濱も文太郎も虎吉も瘤の眠牛和尚も村の人々もお秀も力も總五郎も仙七も黒犬も心配さうに此方を見て何やら叫んで居る、岩の向ふの鰐岩には是も又環や琢磨や富喜子やお時等が同じく途方に暮れて居る。潮が段々高まつて篤子の足を浸しさうになつて来る。彼女は泣きながら段々上へくと登つて行た。彼女の登るに従つて波も登つて來さう。

と何時の間にか幼さな女の子が二人現はれた。二人とも非常に美しい眼をして眞黒な髪の毛が肩まで垂れて、白い胸當をしたまゝ、兩腕も膝から下も裸である、むつちりとした肉附は繪に書いた天使の様！

「御姉様何故泣いて被居やるの？」

と白い花を持った児が言ふ。聲は金鈴の如く涼しい。

「私ね、お家へ歸られないのよ」と篤子は答へた。

「どうして？」

「波が高くて」

「泳いで行たら可いちやないの？」と紅い花を持った児が言ふ。

「私泳げないんですもの」

一五

「下を見るから恐いんですわ、上を見て被居やい」と白い方が言ふ。

「でも波が登つて來るんですもの」

「太陽の處へ被行やい、太陽へ」と紅い方が言ふ。

「遠くて行けないわ」

「私達の御姉様におんななさい」

「え、なりますわ」

「太陽へ〜」と白いのが叫んだ。

「太陽へ〜」と紅いのが叫んだ。

「太陽へ〜」と二人が叫んだ。

と見ると何處から集まるともなく、無数の兒女が篤子を圍繞いた。

「まあ綺麗な、皆な可愛らしい事」

吾を忘れて叫んでる中に兒女等は一樣に篤子の袖に袂に縋つた。

「太陽へ〜」

篤子の身體は自然に軽くなつて數十人の兒女と共に足が漸々地を離れた。岸の人々は聲を擧げて喝采した。篤子は嬉しさに喜び勇んで思はず「太陽へ」と叫んだ、吾れと吾が聲に驚いて眼を覺ますとお濱の優しい眼が先づ眼に付いた。

「あゝ私今ま何とか言て？」

「えゝ、夢を御覽になつたんですか」

「面白い夢よ」

「まあ什麼な夢を」

「天へ登つたのよ」

「へえ」とお濱は縁喜でもないといふ様な顔をして居る。

「もう幾時ッ」

「六時近くでございませう」

「窓帷を除て頂戴」

お濱が窓帷を除ると爽々しい朝日が枕元に射し込んだ。

「太陽へ〜」と彼女は口吟んだ、而して彼女は言ひ知れぬ快感にゆつたりと心を任して霎時考へて居たが聽てお濱に向ひ「乳母私もう癒つたから退院するわ」

「什麼遊ばしたのでございませうお嬢様」とお濱は眼を圓くした。

「癒つたのよ、私本當に癒つたのよ」

彼女は手を振り足を振て見せた、蔷薇色の頬に微笑を浮べて捲くれた袖から白い二の腕を露して兩手で頭の後腦を抑へ「乳母髪を一寸結んで頂戴」

「本當でございますか、大丈夫でございませうか」とお濱は此の不思議な現象に膽を潰しながら仍且心が踊るほど嬉しかつた。體温は卅七度脈搏も正しい、お濱は

背後へ廻つて髪を束ねた、朝日が枕元を外れて夜具の上に射し込んだ、窓の外はあるか無きかの微風で柳の芽が青い珠を貫いた様に櫻の蕾も太く膨らんで居る、垣根の積殻や枸杞の類までも一樣に芽を吹いて美しい朝日の懐にすん／＼育つて行く様、何處からとも無く鶯の啼くのが聞える。篤子は歡喜の眼を擧げて外を見やつた。何といふ爽々しい朝だらう、頭は心の底から澄み渡る様に明りく、新らしい血が疲れた身體を咬つて床の上に踊り跳ねて見たい。

「乳母、私癒つたら什麼に嬉しいだらう」と彼女は喜びの涙を浮べて言た。「今まで言はなかつたけれども私死んで了ひたいと思つて居たのよ、皆なに厄介をかけるし私だつて生きて居ても詰らないと思つたものだから、だけれども私生きるわもつと／＼生きて今迄の恩返しをするわ、其れはね、私の身體で出来る事なら何でもしてよ、死にたいなんて思ふ事は我儘な心から出るんだわね、私はね十九年の間種々な苦勞もして見たけれども、其れは皆な自分の身體に就ての苦勞なんだ

もの、他人の爲には何にも苦勞しなかつたわ、お前を初め皆様に世話になりながら、自分だけの苦勞に負けて死にたいなんて言ふのは本當に私の我儘よ、私これから生れ代つて仕事をするわ」

「仕事と仰しやると? ……」

「可い事を考へたのよ、私孤兒のお母様になるわ」

「えつ?」

「私ね、淺蟲へ歸るのよ、淺蟲で孤兒院を建ててるの、東京でやつても可いけれども東京では善い事もある代りに悪い事が多いから」

「爾ですとも東京者は嘔吐ですよ」

「私ね、赤ん坊の時から親に離れて言はゞ孤兒だつたのでせう、其れをお前に育てられて漸と此位になつたのなもの、若しお前が無かつたら私は什麼なつたか知れやしない、世間の孤兒に比べると私は餘程幸福だわ、其れもお前があつたから

なのよ、引取てくれる者が無ければ孤兒は皆な野良犬の餌食にならなければならぬ、親の身として子供を殺したいものもなく捨てたいものもなく但しはお腹の中で暗から暗へ送りたいものもなからうが、其れには言ふに言はれない事情もあらうし、爾いふ人の秘密まで本當に相談してくれる人があつたら世間には罪の數も減るだらう、環さんが慫ういふ病氣になつたのも詰りは爾いふ相手が無かつたからなんです、私だつてお母様と御父様と正式の結婚したのではなし、私がお腹に居る時、どんなに二人が辛い思をなすつたらう、其れを思ふと私が爾いふ人達の相談相手にもなり、罪の子を淨めてやるのは私の天職だと思ふわ」

## 一六

語るに従つて篤子は益々活氣づいて来る。

「御尤もです〜」とお濱は頻に涙を流した、彼女は篤子の説に感動するよりも寧ろ病氣本復の嬉しさに泣いたのであつた。

醫者も来る、お濱の報知に文太郎總五郎仙七が駆け付けて来る。

「別に珍らしい事でない、神經衰弱の患者には熟睡後に急に恢復する例が幾らもある」と醫者は言た。

孤兒院の計畫を聞いて誰よりも第一番に賛成したものは仙七であつた。

「全く可い事です、少許りの經費なら私が出しませう、だがもう一つやつて貰ひたい事があるんですが」

「什麼な事？」

「犬の孤兒も引受けて貰ひたいもんで」

「犬の孤兒？」と一同は驚いた。

「つまり野良犬です、黒犬の様な奴です、犬でも人でも食へなくなると狂氣になるものですよ」

「全くだ」と總五郎は言た。

恚ういふ餘談の中に文太郎は一人黙つて、もぢくして居たが聽て重さうに口を開いた。

「お嬢様一人で孤兒院を御やりになるんですか」

「えい爾よ」

「併し男の手がなければ」

「無論亭主がなくちやあね」と總五郎が言ふ。

「いゝえ」と篤子は直ぐに答へた。

「私は身體も心も孤兒に捧げるんですから」

「爾でせう、爾だらうと思つた」と文太郎は腕を拱んだ。

此上は只だ肥立を待つ許である、人々は退院の日を相談し初めた、賑はしい笑声も漏れる、仙七の洒脱な軽口は一層座に活氣を添へた。其片隅に力は黙つて唇を噛むで居る、彼の前途に深い闇が横たはつて居る、希望もなければ光も無い、彼は室中の空氣が鉛の如く眼も鼻も凡ての皮膚が糊付にされた様な氣がした。其れでも彼は一步も外へ出ない、人が何と言ても首を動かして返答するだけである而して物に驚いた様な眼をして篤子を見詰めては又た自然に頭を低れる。

「氣の毒だ」と篤子も其れに氣が付いた、けれども何と言て慰めて可いか解らない、二人は折々眼を見交はす事がある、爾いふ時には力は強て笑顔を見せた。

「什麼に苦しいだらう、私が此室に居ない方が可い」と篤子は思つた。

翌日篤子は醫師及び人々の勧めを拒んで退院した。退院の際に彼女は人々を遠

ざけて力に憑う言た。

「力さん、私御察し、てよ」

力は眼を豁と開いて篤子の顔を見やつた、眼には充滿の涙を湛へて居る。

「僕は環を愛する様になつて見せます、其代りに貴方は……」

「無論私は貴方を愛しますわ」

「解りました、僕は屹度環を愛します」

二人の手は緊乎と握られた、互に心を信じ、靈を了解し合ひ、愛し合つて居ながら肉の墮落は二人を西と東、永劫に引離して了つた。二人の手は何時までも引結んだまゝ動かなかつた、動くものは脈管を傳ふ情緒と燃ゆるが如き熱であつた。

「左様なら」と力は篤子の手を放した。「見送りはしません」

「其れが可いわ」

扉に手を掛けて振返つた時、環は眼をさました。

「殺してくれ、さあ殺してくれ、毒を飲ますなら飲んでやるわ」



仙七の勸に由て篤子は乳母と總五郎を伴れて鎌倉へ保養に行た。文太郎は獨り残つて毎日虎吉の行方を探し廻つた、けれども一向手掛りを得ない、お秀を探したは是も解らなかつた。

篤子は日増に健康になつた、而して今までよりもつと美しくもつと深い眼色をしてもつと快活になつて其れは自から努めて快活を装ふらしい點がないではないが、讀書や散步、裁縫や學校訪問、孤兒院の調査などに毫も身體を休める事がないので昔の様に淋しく物思に沈む様な時がなかつた。彼女の心は毎に前途の光に燃え立て居た、多勢の孤兒は毎も彼女の夢に現はれた、瘡せた子供、片輪な子供、營養不良の青い顔、瘡青涕垂れ拗くれ者、暗い顔をして尻目に人を覗き込む一群が蠢々して悉く手を舉げ「早く助けて下さい、私共だつて生れた以上

は生きて居たいのです」と言ふかの様。夢が覺めると彼女は新たな勇氣に満ち充ちて。

「待て被居やいよ」と獨り口の中で言ふのであつた。

時には什麼かすると眠れない事がある、彼女は力に手紙を書いた。

「私は人に愛される事と人を愛する事の爲に生れて來たのだと思ひます而して本當の幸福は人を愛する事から得られるものだといふ事は今初めて解りました、孤兒を愛して育てる、憊ういふ計畫だけでも私は非常に力強い嬉しい輝やかなしい氣持がしますのよ、愈々一人でも二人でも孤兒を引取る事になつたら什麼なに私は幸福を感じるでせう。力さん貴方も何卒環さんを愛してあげて下さいね」

「僕は努力して居ます」

篤子は又憊ういふ手紙を書いた。

「……生意氣な様ですが、お互に本當に愛しませうね、私が孤兒を育て貴方が環さんを育て、二人は生甲斐のある生活をしてこそ、二人の本當の愛が結付くものだと思ひます、昔の愛が尊い二人の記念なら、此の愛を益々潔く益々尊く生長させたいと思ひます、私は東京へ出てから苦勞をしました、私の考へが間違つて居たからですわ、御父様に會ひたいと思つて上京したけれども到頭死際にも會はず、御祖父さんと伯母さんの仲を和らげたいと思つたけれども、其れも出來ず、貴方と結婚の御約束まで出來て其れも無駄になりました、何一つ私の望みが適つた事はありません、けれども私は慙うして生きてる事が何といふ幸福でせう、可笑しな話ですけども私は什麼いふ譯か人様に可愛がられるのが好きです、幼さい時に髪が好いか色が白いか言はれると本當に嬉しかつたのよ、大きくなつて學校の出來が好いか温順しいとか氣が利くとか言はれると其れも嬉しかつたのよ、而して私は大人になつたら彼様いふ風に多くの人を可愛がつてあげたいと

思つて居ました、私が人に可愛がられるのが好きですから人様をも可愛がりたいと思ひますの、環さんだつて屹度私と同じですわ……」  
「僕は努力して居ます」力の返事は仍且一行であつた。  
二週間は過ぎた。と或日力から手紙が來た。  
「環は母を恐れて近付けない、一刻でも僕が傍に居ないと暴れる。僕は努力して居ます」  
「環さんは貴方一人を力になすつてるのです」と篤子は書送つた。  
二三日後の書面に「環の容態頗ぶる好い」とあつた、其翌日のに「環は室内を歩く様になつた」とある、二三日音信が無かつたが、或日左の手紙が來た。  
「環の身體は平常に復した、明日退院する、けれども彼女の腦は元との状態でない、彼女は痲痺性の痴呆になつたらしい」  
篤子は思はず手紙を疊に落した。

「什麼した」と總五郎は手紙を拾ひ上げて讀んだが、「罰が當つた」と叫んだ、霎時足ももち／＼して、「憊うなつて見ると可愛さうにも思ふ」

手紙の末尾には例の「努力」といふ字が筆太に記されてあつた。

「残酷だわ」と篤子は言た、併し其意味は篤子自身にも解らなかつた。

一と月餘りで篤子は鎌倉から東京へ歸つた、而して思ひ立た自分の決心の鈍らぬ中にと只管歸國を急いだ。今日／＼と仙七が抑留したが其の甲斐がない。篤子とお濱は最早魂魄が淺蟲へ飛んで居る。總五郎は篤子に従いて行きたいのと、仙七の參謀になつてもう一旗揚げたいとの板挟みになつて居たが、到頭憊う言た「俺は什麼しても東京を離れたくない」

文太郎は何處までも篤子と共に暮らしたいと言た。

其れは四月の半ばで都の櫻が一度に咲いたかと思ふともう散りかけて了つた、埃交りの春風で色彩に賑はしい町々を吹いて路行く人々の顔は光に満ちて居る、木といふ木、草といふ草は此の光を迎へて緑の葉を勢よく伸ばすと、天地は恰も生き返つた様、氣の早い青年が夏帽を被つてるのも見える。

篤子、お濱母子の三人が出発の時には、春雨がしとくと降て居た、停車場前の車や看板や茶店の硝子戸が濡色に光つて、細かく音なく降る雨の脚は地の底へ静かに沁み込みさう、蛇の目の傘や番傘が高抵に重なつて素足の女が膝から下を端折つて紅い布が少許見ゆるも何となく艶に哀れが深かつた。上野の停車場の中は薄暗い。篤子は腰掛を離れて庇の下から上野の山を眺めた、櫻は散て名残りもない山の中腹は萬樹の緑が犇めき合つて極めて穏やかに雨に濡れて居る、春も最早去つたと篤子は思つた。

文太郎と篤子は並んで立た。而して二人は八年前の事を憶ひ出した。初めて此の停車場に着いた時二人は仍且此の庇から此の山を眺めたのであつた。

「あの時お嬢様はお下髪に結つて赤いりぼんを結んで居ましたね」と文太郎は言た。

「貴女は淺蟲小學校の徽章の着いた帽子を被つて居てよ」

「八年になるわね」

「爾、八年！」

二人は淋しく微笑した、而して文太郎は元の席に復つた。仙七は獨り饒舌つて人々を笑はした、總五郎は今年中に篤子の孤兒院へ五萬圓を寄附すると言た。

改札間近くなつて、大急ぎで群集を押分けて來たものがある、其れは力と環であつた。

「まあ環さん能く被來つて下すつたわね」と篤子は環の手を取た。

「あゝく」と環はにこく笑つて篤子に挨拶したが直ぐ振拂つて力の腕に縋り

「これは誰方？」

「篤さんだよ」と力が言て聞かす。

「あゝ爾々爾だわね」と今度は安心したらしく篤子の傍に寄り仍且にこく笑つて居る、解つたのかと思へば直ぐ又「これは誰方」と力に訊く。

一寸の隙も力の傍を離れない、恐ろしく華美な装をして居るが顔の白粉は非常

に濃い、眉と言はず生際と言はず、一面に塗つけて全で餛飩粉の様にぼろ／＼粉が零れさう、眼が腫ればつたく鼻穴まで粉に染まつて居る、而して絶えず懐中鏡を出しては自分で唾を指先に付けて鼻柱ばかりを撫でる。

「お可愛さうに」と篤子は先づ涙ぐむで。「もう癒らないでせうか」と小聲で力に訊く。

「駄目ですな」

「お可愛さうですわ」と篤子は繰返す。

「爾です可愛さうです」

「貴方は爾お思ひになつて？」

「爾思はなければ僕は生きて居られません」

篤子は黙つた、而して静かに「苦しいでせうね」と言た。

僕は努力します

儼然として力は言た。

改札口からぞろ／＼行列が崩れる。篤子の一行は幸ひに餘裕のある車室に入つた。

「三等ですか」と仙七は呆れて言た。

「えい、来る時も爾でしたから」

仙七は黙つて了つた。

出發の笛が鳴る、窓近く立てる人々は後へ引退るとお濱と總五郎はめそ／＼泣き出した。

「環さん御機嫌能う、御大切にね、御手紙をね、又た御目に掛りませうね」と篤子は窓から首を出して言た。

「左様なら環さん」

「左様なら」と環も言た、而して片手を力の腕に絡んで、や／＼笑つて居る。

「力さん」と篤子は叫んだ。

「努力します」と力が答へた。

「來年又た來てくれ」と總五郎はおろ／＼聲で言た。

汽車は靜かに動き出した。左様ならくの聲が双方から起つた。と此時篤子は電氣に觸れた様に驚いて思はず「虎さん」と叫んだ。汽車は遠慮もなく速力を早めた。見送りの人々は散て了つた、ブラットホームは人の影もない。と、最終の柱の蔭から虎吉の姿が現はれた。淺黄色の股引に洗晒の絆纏を裏返しに着て麥藁帽を眉深く被り兩手をだらりと下げて力なく歩き出した。

「俺は男ぢやねえ、恩返しが出来ねえ」

突然立止まつて兩手を拱んだ。彼は泣いて居たのであつた。

讀者諸君、鳩の家は是を以て一先づ終りとする。篇中の虎吉の身上に就ては語

りたい事が極めて多いが其れは後日「虎公」と題しお秀と共に筆を改めて讀者に見える積りである。

篤子は若い母様として數十人の孤兒に慕はれて居る。丁度東京を出てから一年の後、力から手紙が來た。例に依て簡単な文句であつた。

「僕は環を愛する、不具者の彼女を深く愛する、僕は男といふものと責任と節操とを初めて了解したと共に環を愛する事に依て限りもない幸福を得た事を貴方に感謝する。……須磨にて、力」

其後の事はお話する必要もない。お時は環を嫌ひ環はお時を嫌ひ、此の親子は永久に別れに、琢磨と富喜子は五萬圓を拵帯して新劇團を組織し地方を巡業して居る。お時は目下高利貸を商賣にして居る。

仙七は日の出の勢である、而して總五郎は仙七に尻拭ひをさしては仍且相場を續けて居るが篤子へやる手紙の終りは毎も恚うであつた。

「近々の中に五萬圓の寄附をするぞ」  
 文太郎の事は「虎吉」の中に記す積だが、彼は其後瘤の和尚の後を承けて長春寺の住職となつた。

# 鳩 の 家 下 終

昭和十四年一月十日印刷  
 昭和十四年一月廿五日發行

鳩の家 下卷

【定價 壹圓五拾錢】

— 製 復 許 不 —

著 者 佐 藤 紅 綠  
 發行者 東京市神田區神保町一ノ三〇 大 谷 德 之 助  
 印刷者 東京市神田區神保町一ノ三〇 大 洋 社 印 刷 部

發行所 東京市神田區神保町一ノ三〇 大 洋 社 出 版 部  
 振替東京五九〇二番

部 本 製 社 洋 大 ・ 本 製

大 洋 社 版 最 新 刊 名 著

窪田空穂著 歌評釋と 短歌隨見 新四六函入上製 定價壹圓八拾錢	澁川玄耳著 支那獵奇秘話 新四六函入上製 定價參圓	澁川玄耳著 支那哀怨秘史 新四六函入上製 定價參圓	小林篤里著 英傑 豐臣秀吉 新四六函入上製 定價壹圓貳拾錢	小林篤里著 名將 眞田幸村 新四六函入上製 定價壹圓貳拾錢	小林篤里著 志士 高山彥九郎 新四六函入上製 定價壹圓貳拾錢	大隈博誠著 必ず立身 出世する 名前の附け方手引 四六版函入上製 定價壹圓五拾錢	松尾五郎著 必らず 儲かる 株式相場の實戰術 四六版函入上製 定價壹圓五拾錢	前田默鳳編著 眞行草字鑑 菊半截函入特製 定價貳圓	庄野信治著 戰時下の 式辭挨拶手紙教本 菊版上製 定價壹圓五拾錢
---	------------------------------------	------------------------------------	---	---	--	---	---	------------------------------------	--



387  
2  
649

終



大洋社版